
RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGヒロインという名のチート野郎。

【Zコード】

Z5849Y

【作者名】

菜智

【あらすじ】

大人気RPGから飛び出してきたのは9割シンの1割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派なチート。そのチートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展!?そして、そこからゲームの世界へジャンプ!?

主人公「…あー。頭いてえ。」

ヒロイン「風邪か?」

主人公ちげえし…

対処1・まず、自己紹介。んで、居候。

「神とのゲーム。～それは気まぐれ～」

そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気RPGゲーム。

だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を驚きにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、上南集カミヤシユウである。容姿は、まあ…何処にでもいる平々凡々な感じで想像してくれ。自宅警備員のゲーラタだ。

だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかいない部屋の、自分の背後から。

『ほう。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』

思いつ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば

『ん?どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』

見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの人気ヒロインがいた。

「……」

取り敢えず、後ろの「誰か」は無視してゲームを進めていく。が

『ほうほう。』

だとか

『このダンジョンはこうなっているのか…。いやはや、興味深い。とかずつと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。
「誰か」はいつの間にか我の顔で俺の後ろにあるベッドで寝いでいた。

『あー何故止めた！？私は見たいと言つたんだ……。』

「ちょっと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄つたシワを伸ばしてくる
誰かへを見ていると

『全く……どうしてこうシワが出来るのか……』

いや、普通ですから。それ。

『おい、お前。早くゲームを開けろ。私は見たいんだ。』
この大人気RPGヒロインを支持しているアタクからしたら、きつ
とこの性格は……どうなのだろう。

「あの、さ。貴方は、誰ですか？」

『私が？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。
で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺
の所にいるんですか？』

『さあ。それは私の預かり知る事柄ではない。』

いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしようと？

『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』

「じゃあ、誰の意思？」

『……え、と。』

自称ヒロイン・ナツメは少し肩をすくめとしたり、少し言いつ
らうような顔をした。

『……ゲームの、ボス。』

そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男など
いないはずはなく。

「……はあ。」

だが、そんな現実からぶつ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺には備わっていなかつた。

『ほん。……とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話をな
る。』

「……は？』

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。

「あのさ。ゲームの中に戻つてくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』

「……つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないといと？」

あー。頭痛い。遂に、じゅぱん自宅警備員丸三年の俺にも幻覚が……。

『と、いう訳で。これからよろしくお願ひします。な？』

にっこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。

「これは、面倒見なきやいけないんだろうなあ……」

これから起ころるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。

……取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを開いた。

……後ろを気にしなこう。

対処2・チートは現実でもチートwww

前回までの振り返り。

大人気RPGから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちょっとの天然。
そんなツンツン^{チートヒロイン}テレ少女と一^{じつぱな}プレイヤーの自宅警備員丸三年の居候物語。

ナツメのちょっと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。（暗くてそれ以上は見えない）だろう。

俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらいそろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもつともつと食べ物を求めてくる。

気づけば残り物はなくなつていてが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。

ぐう。

うん。腹減つてゐなあ、俺の胃よ。まだ足りていひんだろ？分かつてゐるさ

ぐう。

だが、それは鳴りすぎだろ？

ぐるううう。

自分の腹の音ではない音が俺の後ろで鳴る。さあ、落ち着こい。そして、振り向くんだ。

振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。

「……狡い。」

「…は？」

「『』飯……狡い。私はまだ食べていないと。」

ああ、あの時にバツチリ起きてて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行つて何か食べる物を探したが……生憎と無かつた。

「……無い、のか？」

「ああ、さつぱり全くぐだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」

「じゃあ、外に買いに行くぞ。」

…は？今、自宅警備員にとつての禁句が出てきたが。

「下には、コンビニエンスストア、があるのでうへ、

「買いに行け、と？」

「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行つてやる。」

あくまでも傲慢ソソの態度は崩さない。ここまでいふともう清々しい。

だが、ここで折れてしまつては自宅警備員の名折れ。俺は若干強く。

「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行つてくれれば？」

「…我を通すつもりか。私に対し。…いい度胸だ」

ナツメは口を手で押さえて小さく、くつくつく、と笑つた。そして、いつもの傲慢な微笑みで。

「なら、私が連れ出してやる。お前の意思とは関係なく、な。」

「何言つて」

ナツメは俺の言葉を無視して。

「迅風」

その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。

「どうだ？私の魔法は」

目を開ければそこにはよく見知つているコンビニ「時11時^」があつた。

「……は？」

「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」「魔法って……!?」ここは現実世界だろ！」

そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」

そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ頑垂れた。

こうして、俺の自宅警備員生活は三年という短い期間で終わっちゃつた。

対処2・チートは現実でもチートｗｗ（後書き）

はじめまして！今日はちょっと嗜好を変えて「omeletteほいお話です（＼＼＼＼＼）

ゲームのチートヒロインが暴れまくりますwでも、ちょっとシリアルス投入してみたりw

ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ15周年を迎えた某シリーズが大好きです。7.5さんのね（＼＼＼＊＊）

対処3・ゲームの戦いは現実では結構なハードwww

前回までのあらすじ。

ツン…もとい、傲慢^{オーラ}テレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によつて俺の自宅警備員生活は呆氣なく終わつてしまつた。：なんだかなあ。

コンビニへ7時11時[♪]である程度の「」飯（勿論ナツメの分も込みで）をどつさりと買い込む。

その中には「」飯[♪]なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入つてゐる。財布が悲しい…。

「早く帰るぞ。」

そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のよつて口^コと微笑む。口調は何ら変わつていなが。

「…はあ。はいはい。了解しましたと。」

俺はどうさりと入つたビニール袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回してゐる。

「どした…？早く帰るんぢや「静かに」

ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮つた。その口ならない雰囲気に俺は黙り込むしかなかつた。

「…先に帰つていろ。私の分は取るんぢやないぞ？取つたら、分かつていいよな…ん？」

ナツメは俺にそう言つと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行つていた公園へと走つていつた。

俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去つた事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」

『いいえ。単に私が興味を持つだけですよ。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』

並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。
「姿は見せてくれないのか？私はしつかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」

ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。
『貴方の頼みは断れませんからねえ……。くあの方へからの命令もありますが』

木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しい
ほどの黒と青の相まつた見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。

「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」

靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。
だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。

ただ、先のように妖艶な笑みで。

「…水槍」

ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。

ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。

『……ははっ……』

唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。

ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していく。
と、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、
そして、水龍の後ろを通り抜けていく。

先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される
答えはたつた一つ。

(後ろに私が動搖するものがある。……つ――)

ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もつ一つの魔法を作動させる。

「つ影身！」

ナツメの影を借りて創られたもう一人の「ナツメ」は本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動すると「ナツメが動搖するもの」を木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。

「護花」

影の「ナツメ」と「ナツメが動搖するもの」に覆いかぶさるよう、大きな睡蓮の花が現れる。

「全く。私は帰つていろと、言つていたはずだが」

ナツメの口調はしつかりと怒つていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。

「……ははっ。まあ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」

その表情に少しば驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3 ゲームの戦いは現実では結構なハードwww（後書き）

： 戦闘シーン楽しかつたです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますwww

対処4・チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。

取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、ど。もうこれで終わりか?」

ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。

『……秘欺。』

声の響きが薄れしていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしつかりと歩みをナツメに進めていく。

「バツクアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」

影の「ナツメ」も後ろの集を護りの花“護花”ケンカに包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を一人で紡ぐ。

それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。

『……言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』

二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。

『其方は我と共に、照らす光と在れ。』

形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。

『……誓の翼。』

鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。

「お前の技：秘欺は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一體ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身の量産系か？」

桜の花弁となつた光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

つ。

「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」

「ふあ、や……やあああああああ……」

光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによつて、刃となつた花弁は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。

だが、その中でナツメは小さな違ひ…異変に気付いた。

撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まつていく事に。その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官であるかのように立つていた。

(つまり、あれが本体…!)

ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。

「全く出てこないからいつもの影かと思つていたが…そうではなかつたな。」

影は口を二やり、と歪ませて

『流石は“神力”^{チート}の名を冠するだけあつて見破られましたか…いやはや残念。』

影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会つてはいなかアサギ・リヴェリアス」

『確かに。しかも私は影を通してでしか見ていませんものねえ。ナツメ・イウエ・リストイアート。』

二人は和やかな微笑みで…互いに火花を散らして。

「で。お前が来たということは何かは預かつてているのだろう?でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て?」

男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。

『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自らく縛りを壊していくか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をす
ると霧のように霧散して消えた。

“護花”が消えて集はナツメの所へと向かつて、その表情を見て驚
いた。

「……あ。どうした？」

ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにいつもの傲慢な微笑みに戻っていた。

「何を言われたんだ？」

「知りたいか？」

ナツメは自分の影身ウツシミを戻すと少し迷つてから。

「ゲームの中に戻れる方法がある、と…」

「良かったな！」

集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムツとした顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。

「嬉しそうだなあ…。まあ、いい。帰るぞ。」

わざわざ歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論

チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構

…見返えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかばないw

対処5・チートの「機嫌ナナメ」

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子がどうもおかしかった。

いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かつた事が。

「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変だぞ。」

「ああ。気にするな…別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」

そう言つてまた上の空。いうなつてしまつてはいつちの調子も狂つてしまふ訳で。

まあ、当然、ゲームも進められない。

「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」

緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にまづつすらと隈が出来ていて。

「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」

「え？そりゃあ…だつてお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」

「…生まれた場所…か。」

ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思ってそれ以上は聞かなかつた。

…聞くことが出来なかつた。

「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」

ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言つ。

「…もし、私が本当に消去たら、どうする？」
（きえ）

そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となつて消えてしまった。多分、あの魔法…迅風（ショウブウ）を使ったのだろう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。

ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儚く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寝息で。

「……このままだったら、良かった…？」

一人、ぼつり、と呟いても応えてくれる人は誰もない。

「分かんないよね。うん…分かつてる。だつて」

白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。

肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。まるで、それは人形。

「…今まで続くのかな」

“ 今まで？私が飽きるまで。 ”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しつかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“ いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさつさと言つていろと思つていたのに。残念”

「お前…いつからここだと分かった？ここが私の…」

“ さあ？でも僕にどうてはそんな事はどうでもいいんだ。 ”

“ 君という玩具おもちゃが中々帰つてこないからさあ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」

“んー。でもここでの君も結構面白いからさあ……。もう少し鑑賞させてもらひつかな？”

「……はっ。私を野放こしておくれとまな。面白い」

声はくすぐすと、子供のように笑った。

“後一日。それだけ経つたら僕は君とお君の近くに居る人へとびきりの贈り物をしてあげる。”

「……消える。」

“うふ。そろそろ戻らなくつけないからねえ。それじゃあねえ”

声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。

「…私は」

咳きに応えてくれる者も、いない。

対処5・5・ゲーム話（前書き）

今回は本編ではありません。ちょっとした息抜き用の話ですので気楽に見てもいいえれば良いと思います。中身はギャグっぽい（？）です

対処5・5・ゲーム話。

「さて、今回はいつもの話とは違つて……ちよつとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」

「あのわ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」

集がペコペコと頭を下げる。

「今回は私がヒロインを務める大人気RPGゲームのあらすじを紹介しようと思つていい。」

「大人気つて自分で言うか普通…」

「何か言つたか？ん？」

ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒つている証拠だつたりww
「はあ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらつていないうからな」
「文字数など関係ない。いざとなつたら私が作者に攻撃魔法をぶつぱなしッ（「」）

暗転（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをじ覽下さい。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。

その時、誰かが願つた。否、誰かではない。世界中の皆が願つた。

「どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光
を…。」

その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。

世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くで遠い場所で生まれ落ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光^{ヒカリ}。

その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられた記憶と過去を背負って。

そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかつた者へ、ナツメは問う。

「ねえ…」

（ナツメがあらすじをしっかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。何というか）

「ナツメしてあらすじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。とか思つていらないだろ?」

「……（・ゝ・）」

「よし、お前。そこから逃げるなよ?」

ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。

「……俺、生命は大事にする奴だから…」 = = バ(：。)

／

集は逃げた!しかしナツメに囮まれた…!

「ふ、ふふふ。逃げられると思つなよ…？」

暗転

「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張りま s (r y
がくり、と集の頭が落ちた。

対処6・新たな波乱はやはりアイツが持ってきたw

「んう……ふう。」「

「ひりり、と俺のベッドでナツメが寝返りを打つ。只今、朝の6時を過ぎたところです。

先に言つておいた。俺は変態ではないといつ事を。

「……は、ん。」

確かにナツメの寝顔はしっかりと見てはいるが、それは不可抗力の結果であつて…。えつと、今の俺の姿勢は…、ナツメに腕を掴まれて（もんのすごい力で）ベッドにダイブ。離れようにも力が強すぎて離れられないといつ

（何の漫画だよ…。このベタベタな展開は）

「……ん。」

また、ひりり、と寝返りを打つた瞬間俺の心臓は許容範囲を軽く超えた。ナツメの顔が、とにかく近い。

互いの寝息がかかる程に顔が迫ってきている。おまけに、ナツメのいつもより緩んだ顔もかなりのレアな訳で。そんなチャンスの時に離れるなどという愚かしい事をする事など言語道断。
ばくばく、と鳴り響いて仕方がない心臓を無視して俺はその姿勢を維持し続けた。

……後にこの行為が仇になるとは分からずだった。

「……信じられない。お前、一回マジで死ぬか？」

「だから、ごめんて。」

その後、起きたナツメにこてんぱにされたのち…ゲームを再開した。もちろん、盛大なビンタORキックを見舞われた訳だけれど。ビンタの痛みが中々引いていかないなか、唐突にインターホンが鳴る。「はあーい

がチャリと扉を開けても、誰もいない。

「ピンポンダッシュショカ？」

「ピンポンダッシュショカねえ！」

下を見下ろせば、そこにはぶかぶかのローブを着たちつさっこ女の子。服装の模様から察するに…。

「ナツメに何か用か？」

「其方、姉様を知つていつのですか？」

あー、うん。このぶつ飛んだ感じはあいつの知り合いだな。

「ユサギ…？」どうしてここに

ナツメがノロノロと奥から顔を出す。女の子（ナツメが言つにはユサギ）が嬉しそうに手をぶんぶんと振る。

「姉様」。ユサギ、ここまで来たんだお。すつゝいでそお？

「ナツメ…この人は？」

「ああ、私の妹のユサギ・イヌヒ・オーフアだ。」

ナツメがユサギに中に入つてくるように手招きをする。ユサギは靴を脱いで入つていく。一応、俺の部屋ですが？

「姉様。そろそろお家に戻つてくれさい！あたしだけじゃ、お家を維持し続けるのはもう無理ですぅおー！」

「そつは言つても…私はここが気に入つてる。だからここからは出ない。」

ユサギは、むう、と大きく頬を膨らまして手をバタバタと振つて叫ぶ。

「早くしないと、あの人、怒つちやうし、兄様だて維持出来ないんですぅう！！」

ナツメは観念したかのように深く溜息をつく。

「ああ、やつとこれで俺の自宅警備員生活がカムバックしてくる…。」

「そこまで言つのなら、お前が私をここから引っ張り出して連れて帰れ。」

「……はあ？」

俺は呆れたような、驚いたような声を出す。ここは俺の部屋だつて

えの。

「分かりました！！」

おい。俺を置いて話を進めるなし。

「私が姉様を無事、連れて帰ります！！」

あー。やっぱり、こういうなつちゃうのね。

俺は一人の勝手な話に意識を遠くして、考えた。

きっと、俺の自宅警備員生活のサイクルが戻つてくるのはかなりの先だらうと。

対処7・タイムリミジットジャガwww

あれからユサギ含めての俺の生活が始まった。

あれから変わったことと言えば、ユサギとナツメが何処かへと出かけていく事が格段に増えた。

「俺としては嬉しい限りなんだけど…なあ。」

最近ナツメが居続けた影響からなのか、一人がとても静かに感じる。ただ、ゲームの音だけが部屋に流れ続けた。あ、レベルが上がった。

部屋の近くの公園の並木道をナツメとユサギは一人で歩く。正確には、ユサギがナツメの後を追いかけるといった感じだが。
「姉様ー。本当にお願いでうから、戻つてくらせいーーー！」
「嫌だといつたら嫌だ。お前もいい加減懲りろ。」「あねさまあ……。」

ユサギが頼りない声を出す。

「後三日したらくあの人ゝが贈り物するって言つてるけど、つ絶対怒つてますつて！！姉様も、あの人も滅茶苦茶にされちゃいますつて！」
ぴたり、とナツメの歩みが止まる。すかさず、ユサギが追い打ちをかけていく。

「それに！姉様の目的は果たせたのでしょうかー？ならば早くお戻り下さい！」

「ユサギ。」

ナツメの声には怒氣が含まれていた。

「姉様…。兄様がどうなつても、いいのですか！？」
ユサギの足音が遠ざかる。

「分かつてゐる。それでも、私は……ここに……」

“贈り物を”

「贈り物……」

ナツメの頬を冷たい風が通り抜ける。

何時までここにいられるかは、ナツメにも分からぬ。ただ、時間がくあの人>が許す限り……ここに居たいと、ナツメは思う。

がチャリ、とドアが開く音がした。きっと、ナツメとユサギが帰ってきたのかと思つて覗けば顔をムスッとさせたユサギ一人だつた。

「ナツメは？一緒にやないのか？」

「姉様なら一人で歩いてくるつて言いました！」

ユサギはベッドにダイブするとブツブツと一人で呟く。

「大体、姉様が居ないと兄様だつて維持することは難しいのにい……。姉様てば、ここで生活がく名残惜しい>のではないのでしうか……。でも早く帰還しないとくあの人>は特大の爆弾を落とすつもりでしょうしい……！」

「ナツメをどうしてもゲームの中に戻したいんだな。」

ユサギは驚いたように俺の方を見るが、今までの呴きを聞いていれば誰だつて分かる。どれだけナツメを心配しているかを。

「姉様が居なければ兄様だつて……」

「心配しているのか？その、お兄さんもナツメの事を」

「ええ……まあ」

ちらり、とユサギはカレンダーを見る。

皆様には言い忘れていたが、今は12月の29日。後2日で年が终わり、新たな年が始める。

「後2日以内に戻らなければ、盛大に怒られてしまうのですうう……！」

「怒られるつて、誰に?」

「ええと、それは……おこめんじ、こうつモノを使わせてもらひます。」

ユサギは少し気が紛れたのか、帰ってきたときよりも「口」を笑顔を零すようになっていた。言葉遣いも戻ってきてしまったが。

「それに兄様だって……姉様が居なければ……」

「さつきから兄様兄様って言うけどさ、何か事情でもあるのか？」

兄様を出現させた方法はご存知ですか？」

「どんな条件なんだ？」

ユサギは、にま、と笑うと

「それは内緒れす！それに、時が満ちれば、分かりますよ。」

息まで聞こえてきた。全く、子供らしいといふか何といふか。
さらり、とコサギの髪が俺の手に一房落ちる。その感触は正に人間
そのもの。とても、ゲームのキャラクターには見えない。

ごろり、と体勢が変わり顔が俺の方に向く。余りにも可愛らしいその寝顔に顔が綻ぶ。

だが、俺はこの時点でもう

これが、デジヤヴだと云ふこと。

「つづつ變態」

ああ、意識が飛んでいく5秒前。

がす。 鈍い音がする。

俺の意識は5秒を待たずに飛んでいった。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾。

『きっと、必要としてくれる人はいる。こんなに広い世界なり。』
いつの記憶で、誰の記憶なのか。それは分からない。
でも。

『だから、全てを投げ出すような事だけは…やめる。それを約束。』
何もかもを失つてでも、その記憶だけは残したいと思つた。
誰かと会話した誰かの記憶を。

「… わむ。」

朝の寒さにナツメはノロノロと瞳を開けた。見れば、集はゲームを
メニュー画面にしたまま微動だにしない。寝惚け眼で見れば。

「すう…すう。」

心地よい寝息をたてていた。ナツメは思わず微笑みを零す。
だが、そこで、はたと気付いた。自分にはやらなければならぬ事
があると。

「まあ、半分は諦めたのに……ね。」

自嘲するように、ふ、と微笑む。ナツメは毛布をベッドから引きず
り落とすと、起こさないようにそつとかける。

こつそりとゲーム画面のメニューを消すと、そこは何回か見たダン
ジョンだった。進んでいないのか、それともレベル上げのため来て
いるのかは集が眠つていて確認出来ないがその画面はナツメの
不安を増殖させた。

(もつ…。時間が…)

ウトウトと眠気がナツメにゆっくりと襲いかかる。

「ふあ…あ」

大きく欠伸をすると、もぞもぞとベッドに戻つた。

「姉様一。」

「嫌だと言つたら嫌だ。」

またいつものように、一人が口論・只の口喧嘩をしている。

「ナツメも一回は戻つてやれって。」

ナツメは暫しの間、二つを見ていたが

「……分かつた。」

やがて溜息をつくと、妥協したように立ち上がつた。

「姉様……！！」

ユサギの表情は何故か悲しそうな顔だった。

(あんなにも連れて帰りたがっていたのに?)

「と、言うわけで。」

ナツメがくるり、とこっちを見る。

「短い間、世話になつたな。」

その顔は笑つていて、悲しげで。俺は思わず不安げになつた。

何か、二人ともが戻りたくないかのように見えて。

「そんな不安な顔するな。どうせ直ぐに戻れるさ。それまで、精々
私を思い出して一人で泣いていろ。」

「誰がそんな事するか。」

ナツメは口に手を当てて、くすくす、と

とても楽しそうな笑顔を見せた。

「姉様。では…戻りましようか。兄様の為にも」

ユサギがそう言つて、部屋の外に出る。

「ここから、帰るんじゃないのか?」

「一応、私にも感慨に浸りたい時間は必要なんだよ。
ん?」

ナツメはまた笑うとそのまま、部屋を出ていった。

部屋を出て、並木道を一人は歩く。

「姉様…。本当によかつたのですか？」

「何が？」

「あの人のこと…です。何も言わなかつたのでしょうか…。今ならまだ」「もういい。」

「姉様…！」

「もういいって…！！！」

ナツメが今までにない声で叫ぶ。その声に思わずユサギは体を強ばらせる。

「わたしはもう全て決めた。私一人で…終わらせる。」

決意したナツメを待っていたかのように体にノイズがはしり、

“お帰りなさい”

あの声が木靈する。

“全く、早々に決意してもらえて僕、嬉しいよ。”

「満足か？」この結果は、お前の思つ觀劇するに値するものだつたか？」「んな、こと」

ナツメの声がどんどん小さくなつていぐ。

“んうーと。正直に言つちやうと、余り。むづむづとアクションがあるかなあとか思つてたのに…”

「残念だつたな。」期待に沿えなくて。

“だから…。”

キン、とナツメの頭に痛みがはしる。その痛みと共に、解れて溶けていく、誰かの大切な記憶が。

「あ……え、え？」

解れていくなかで揺れて、波のように頭を駆けていく。

“もうちょっと…ね？”

「やめて…！姉様に酷い事は、しないで…！」

ユサギが手を握り締めて、叫ぶ。

“酷い事？違うよ？元に戻すだけなんだ。捻じれてしまつた記憶を、ね？”

更に痛みは酷く、ナツメを苦しめる。

“いっつ、しようたいむー。にやは”

ぽん、と空に音が鳴る。

見上げれば、そこには

「花、火…？」

ユサギが呆然と呟く。

そこには綺麗な、観る者全ての目を惹きつけるような花火が上がっていた。冬に有るはずのない。それと、同時に。痛みは増して、遂に。

「あ、がつ……！？」

頭の記憶が一斉に弾けた。

時同じくして。

集もまた、頭の痛みを感じて。

耐え切れずに、そのまま意識を手放した。

集の記憶が

ナツメの記憶が

解けて、溶けて。

始まる。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾（後書き）

次からはギャグといふか、明るさはなりを潜めます。どうしても話の核に触れる部分になってしまつので…。

でも、読みやすく！わかりやすく！をモットーに頑張つていきたいです。

因みに、本編でナツメが二ートの事を「こう」と言つてるのは二ートの事を本人が余り分かっていないからです。w

対処9 り・すたーと。

暗い、暗い海に体がゆっくりと落ちていく。
でも、そのスピードは恐ろしく遅い。
違う、これは記憶。記憶が体のようになり、落ちていく。
何処まで落ちていくのかは分からない。

終わりの無い。何時までも続くそれは、まるで続き終わらない
あのゲームのよう。

「……ん？」

集が目を開けると、何もないうつもの部屋。だが、集はそこに大きな違和感を感じていた。何かがぽつかりと抜け落ちてしまったかのようだ。

ただ、古い機種のゲームのBGMが聞こえる。

「あれ、こんな事してたか？」

電源を切ろうと手を伸ばして、止めた。

このゲームに何かがある。自分の抜け落ちてしまつた何かが。

「このゲームで、俺は何を…？」

「あー。やっぱり、でしたか。

いつの間にかベッドに座つっていた女の子は分かつているような微笑みで舌つ足らずな言葉で。

「お前は？」

「ああ…あたしの事も忘れてしまつて？姉様の記憶と一回解してしまつた影響なのかな？」

女の子はこて、と首を傾げると。

「私は、ユサギ。貴方の抜け落ちてしまつた何かを全て知つている。

」

集は思わず身を乗り出して、ユサギの肩を掴んだ。

少し、力が入つてぎりぎりと肩が締まる。

「…い、たつ。…痛いです。離してえ。」

「あ…、ごめん。」

ぱ、と直ぐ様手を離す。ユサギは「ヒヒヒ」と笑うとゲームのコントローラを取った。

「嘘ですか？ 大体、私はゲームでの存在ですから、痛み等感覚はありません。それよりも、私達の事と、貴方との関係をお話します。」

ユサギの顔が一変、何も感情を映さない瞳になる。それはまるで、ゲームに出てくるNPC。その様子に、集は只、信じるしかなかった。

やがて、ゆっくりと落ちる感覚が消えていく。

地、なのか分からぬ。そこはとての柔らかくて地に足を付けているといづれとも、浅めの沼に足を浸しているかのよづな…。

“お帰りなさい。待っていた、ずっと。”

ああ、この声に私は何故か安心する。忌み嫌っていた筈のその声を。全てを奪つて、私を閉じ込めた、この声に。

“君の願いは届かない。彼の記憶は全て解けてしまった。君の事も、短い間過ぎしたあの頃も、彼の中には一つも残つてはいない。”

そう、私は只、の人ともう一度会いたくてこの場所から抜け出した。

私はとても傲慢だったけれど、それで、の人を困らせたけれど、それでもあの人は笑つていて。

それだけで、もう良かつた。例え、全てを忘れてしまおうがあの人に

が笑顔でしてくれるのなら……満足。

“君は満足したのでしようつ？なら、次は僕の番。さあ、ゲームの続
きをしようつ？君が来るのを……、待つていろよ。”

キヤラじやない事を言つて、笑つてくれるのでどうなつまつとい、
お前は。

自嘲するように笑つて、私は呟いた。

「ログインする。強制シャットダウンを選択コマンドから消去。」

もじ、もつ一度会えるのなら
ひつと、私は出来るかな？

元の私で。

「 。 」

つて言えるとい。

さあ、ゲームを始める。もう、現実には戻れない

対処10・ゲームログイン

「で、貴方はここまで聞いて何か質問はありますか?」

「……えっと。」

ユサギが全てを話終えて、集は溜息混じりに声を出した。
それもそのはず。ユサギの口から零れ出てきたのは普通には有り得
ないような事ばかり。

(でも、信じられる話……でもある、のか?)

集はユサギの首をこてり、と傾げる様子に脱力して息抜きに、と口
ヒーを持ってきた。二つのカップを持つて。

一つはコーヒー。そしてもう一つはココア。

「ほり。取り敢えず、これでも飲んだら?」ここに来てからずっと何
も食べてないしさ。」「

「…ふわあ…。」

ふわりと立ち上る湯気から香るココアの甘い香りにユサギは…ユサ
ギのお腹が、くう、と鳴る。

「飲んでいいよ。別に毒とか入っている訳でもないし。」

「…いいの、お?」

ユサギは暫しの間ココアをじっと見つめて、手に取ると

「…ふはあ。」

一気に飲み干した。一応、温めの温度にしておいたため火傷する事
はなかった。

「おーいしかったのですうう!!」

「それは、どーも。」

「でも、いいのれすか?」ここまでしてもらひついで…

「いいよ、別に。色々な事を話してくれたお礼的な?まあ、気にし
ないでよ」

集は一口、コーヒーを嚥下するとユサギを見る。

「で、俺にして欲しい事は?」

「貴方の記憶を取り戻します。それが、貴方にとつても姉様にとつても大切な事だから。」

「その方法がゲームにある、と。」

「はい。ゲームの中のボスが全ての鍵を握っています。貴方も、彼女もくあの人人に絡まっている。」

ユサギはにつこりと笑うと、ココアの入っていたカップを両手で包み込む。

「私は、貴方になら姉様を……救つてもうえると思つています。」
そう言つて、何もないカップに口付ける。そこには、確かに新たな湯気が出ている。

「……え？」

「これが、神力キャラちじゆ の真體れす」

（それとこれは違うだろ）

集はその言葉を飲み込んだ。

「……それで、これから的事はわあかりましたか？」

「まあ、一応は。理解は余り出来てないけれど。」

取り敢えず、これから行動をユサギから聞いたが集はいまいち理解があよんでいない。

「……習うおり、慣れろです」

ユサギは思い切り集の腕を掴むと

「口おグインします。尚、新たな玩具ブレイヤをお持ちしましたあ。同時におグインします」

集に有無言わざずユサギは勝手にゲームログインを終えてしまった。

「これは、ログインとかの必要が無いゲームじゃないのか？」

「あい。でも、ゲームから出てきた私のようなキャラは戻る際にはログインという手順を踏めば戻る事は可能ですが」

「結構めんどくさいんだな」

「そう…でしゅね。でも、そうしてでも戻りたいんですよ。私達は

…どんな危険を背負つてでも。〈あの人〉の怒りを買おうとも

「……ふう、ん」

不意に見せたユサギのしつかりとした瞳に思わず、集は目を奪われる
「さて、と。そろそろログイン完了しちゃいますけど…いいんですね
か?私は全て話しました。これから行動が危険である事も、全て。
それでも、行きますか?」

集は苦笑して。

「そもそも、俺が行きたくないと分かつてたら、半ば強制的にログ
インはしないだろ?」

「あは バレてしましました?」

ユサギはにひ、と笑うと

「あ、そう言えば忘れてましたア?」

集の手の平に安っぽいペンダントを乗せた。それは、集の部屋の何
処かで埋まり、時間を無為に過ぎしていた物。

「これが?」

「それを、姉様に会つたときに渡してください。それから、全ては
記憶の修復は始まりますから。」

「…分かった。」

集はそれを壊さないよう、そつとポケットの中にしまった。

ユサギはその様子にまた、へにやり、と歳相応の笑顔を浮かべる。
「うんうん やっぱり私の目に狂いはある、無かつたようですね」

ログイン完了。体のデータ分析開始。同時にデータ移行を開始し
ます。

(……あれ?)

集は今聞いたインフォメーションの声に僅かな疑問を感じた。

そして、ユサギを見る。だが、ユサギは

「…さつきから、私の事見すぎですか?」

あ!? 私に気があるとか!/?うーむ。困るこちあ……

適当に誤魔化すように、顔を背けてしまった。

データ移行、終了します。

体にノイズが走る。それが合図だったのか、一人の体は完全に消えた。

対処10・ゲームログイン（後書き）

何か中途半端で終わってしまってすみません。
でも、この終は仕様なのでwww書き忘れたとかでないですよ？

対処11・ログイン終了かーらーのー?

「…わふつ

ゲームにログインして、体がノイズ化してすぐ、集は何か柔らかい物の上に落ちた。

続けて、コサギも落ちてきた。コサギは慣れているだりつと、集は思っていたが

「ひにゃあー!」

集と同じくすっとんきょんな声で落ちてきた。だが、集とは違つて場所の把握が直ぐに出来たらしく周りを見回すと、ぽんぽんとスラートを叩くと

「こには、ゲームの中盤にある村…確か…。」

集は今だぐわんぐわんとする頭を押さえながら

「オートリアス、の事か?」

「あああーーそこまで一気に来んだよ。」

立ち上がり、周りを見渡せば、見るからにものどかな村の景色。まるでゲームの中に居る事を忘れてしまってやうなほどリアルに、暖かく出来ている。

「さて、ここからはどうするんだ?」

「貴方のゲームの進み具合からして、姉様はここに必ず立ち寄りますよ。」

「その…ナツメ、だけか? そいつは自分の意思で動けるんだろ? だつたらもう先に行つてしまつているんじや?」

「それは無いですよ。あくまでも、姉様の行動はセーブポイントと、ゲームの…しなりお?…それの範囲内でしか動けないんで。」「えつと、つまり?」

「セーブポイントがある場所と、ゲームの進行で訪れる場所には必ず訪れる事がプレイヤーの原則ですから」

ある程度歩いていくと、宿屋の前に煌々と光る蒼色の球体があった。

「あれが、セーブポイント。だから、ここに姉様は訪れます！前にセーブを見た限りでも、こここの少し前のダンジョンからでしたからあ」

『あら、そこのお一人さん！』

二人が振り向くと、そこには恰幅の良いおばさん。

『ねえねえ、あんたたちは旅人かい？』

本当は違うのだが、集とユサギは一度おばさんに背を向けると（どうする？）

（この際、旅人だと言つてしまつた方があこれから的事も都合がいいのですお。）

「はい。」

ユサギが、につこり、と演技っぽい笑顔を振りまく。

『あ、あんた…もしかしてユサギ様かい！？』

「はい。どうですか、あれ以降のここは？」

『はい。おかげさまで…。それよりも、こっちの人は？』

「ああ。私の大切な人を救うために…。私の巫女です。」

『巫女様だったのですか！？いやはや、すみません。』

「いいえ。まだ新米ですのでそう思われても、無理はありません。チート

：それと、敬語はなし、でお願い出来ますか？私は確かに“神力”

の力の加護を受けていますが、それを除けば私もただの人ですから。

』

ユサギはふわりと笑う。

（おお。すごい演技力）

集はその間、ユサギの演技に関心していた。

』

「良かつたですね 確保が出来て。」

「まあ、な」

その日の夜。ユサギにお礼がしたい、と宿屋の店主だったおばさんが言つとユサギは

「でしたら、一日だけでいいのですが…宿に泊めてもうえませんか？生憎と今持ち合わせがありませんが…」

そう言つてうつすらと涙を浮かべたユサギに、おばさんノックアウ

ト

そうして、今、タダで宿屋で休ませてもらつてている所だ。

「やつぱり、ゲームの進行を蔑ろにしなくて良かつたあ？」

「お前もやつぱりゲームのプレイヤーなのか？」

「え？ どうして、ですか？」

ユサギの肩が、びくり、と跳ねる。

「だつて、他の人のように決まりきつた会話をするでもなし…普通に冗談も言つていいし。」

「……あー。えっと。私は、姉様の補佐なので普通の人よりも感情豊かになるように設定されているのですよ…」

「一応、ゲームキャラだと？」

「あい。可笑しいですかー？」

ユサギは、びしつ、と手を上げる。

集はそれ以上突っ込んで上手くはぐらかされる気がしたので、聞く事をやめてベッドに潜り込んだ。

ゲームの筈なのにリアルなベッドの柔らかい感触に、微かに香る柔軟剤のような香りに張っていた気が緩み、うとうと、と睡魔が襲いかかる。

それから完全に眠りに落ちるのに時間はかからなかつた。

「……ふう。バレなくてよかつた」

一人、暗闇の中でユサギが、ぽつり、と呟く。それを聞いているのは光を放つ月のみ。

「私は…うん、いいの。これで…。この道を、選んだから引き返せない。」

暗闇の中に浮かぶ表情は誰にも見えない。月すらも、その様子を伺

い知る事は出来ない。

「……『めぐ。にこ……さん』

「おはおおーー」

次の日の朝。

ユサギはダイナミックに集の眠るベッドに飛びついた。案の定、集

から

「ぐえつ」

押しつぶされたような声が聞こえる。

「お、起きた？ 朝だよ？ 今日は姉様と会わなくちゃいけないんだよ！ ？ 今日しか会えるチャンスは無いのあ～。」

「分かったか、ら……取り敢えず、どいて」

「ほい。んしょ……と」

集は起き上がる。乗られた衝撃が効いているのか、肩やらなんやらが痛い。

「んで、何処にいけば……」

ガチャ、とドアが外側から開く。そこにはしつかりとした意思の宿る瞳。それは人とは明らかに違っていた。

「……姉様……？」

その場の空気が凍りついた。

対処11・ログイン終了かーらーのー?（後書き）

タイトルに深い意味はありません（；；^）
勢いで付けてみた。

対処12・ゲームの深淵へ！？

「姉様……？」

ユサギは恐る恐る名前を言ひ。

「……ユサギ。」

かつ、とヒールの音と共に近寄つてくる。名前の事を指摘しない辺りはその少女はナツメで間違いなかつた。

「姉様……一体どうしたんですか……」

——ひゅ——

ひやり、と集の喉元に冷たい物が宛てがわれる。それを集は見ずに何かを把握した。

(剣……………?)

ユサギが思わずナツメに飛びつく。

「姉様！？やめて！！」

「……」いつは、誰だ。

集を見下ろす冷たく、冷えきつた瞳に集の背筋に冷や汗が伝う。ユサギの必死な様子に、ナツメは今だ冷えきつた瞳を集に向かながら。「姉様！！剣を降ろしてくださいー！」

「……分かった。」

——ひゅ、ん——

ナツメは剣をひと振りして、腰に付けた鞘に戻す。

ユサギは集に手を貸す。集はユサギの手を借りて立ち上がる。

「こいつは、誰だ。」

「この人は……集。……姉様？」

「お前。」

「俺の事か？」

「お前の名前は集といつのか？」

「あ、うん……」

ナツメはそれを聞いた途端。

「…………ふわ。…………」

柔らかい微笑みを浮かべた。その微笑みに集も思わず気が緩んでしまつ。

「姉様……？」

「あ、え……。びづした、ユサギ。」

「今、とても優しい笑顔をしていましたから」

ユサギの指摘にナツメの頬が見る見るうちに赤くなつていいく。

その様子を微笑ましく見ていた集。やがて、ナツメは、わざとらしく

「こほん。」

と咳払いをすると集を見る。それは先までの冷たさは籠つておらず、寧ろ何か懐かしさが籠つっていた。

「何だろうか。お前を見ていると何か懐かしく感じるな。今日会つた気がしない……集という名前も、何処かで……」

「なら、姉様は何故さつき剣を向けたんですか？」

「あれは……何か違和感というか……この世界とは違う者という感じがして、排除しなければいけないと思つていたんだ。それで、気付いたら……すまなかつた」

ナツメが少し頭を下げる。

（あくまで、少しなんだな……）

「いや。気にしなくていいや。急にこつちに来た俺も悪いんだから。

ナツメがゆつくつと顔を上げた時。

「…………ああああ……！」

外から聞こえてきたのは、誰かの叫び声。ナツメとコサギは直ぐ様宿屋を飛び出す。集も続けて宿屋を出る。

「……うつ

思わずむせ返つてしまふ程の血の臭い。雲一つ無い青空の広がる朝には相応しくない臭いだった。

「こっちから、か」

その臭いは風にのっているようだ、その元は村近くの森からだつた。三人はそっちの方へ歩いていく。次第に血の臭いは濃くなり、森に入つてすぐ血の跡も見つかり、三人の警戒は更に強まる。やがて、広い場所に出る。そこが一番強く血の臭いがした。

少し進むと、聞こえてくる音。

ぐちゅ……がり、じつじつ……ぼと

「……あ。」

こっちに向かつて投げられたのは、骨。それは、人の腕程の長さでべつたりと血と何か透明な液が付いている。かなりの質量のあるそれは腕のようなもの以外にも広場に散らばつている。

足。腕。……そして。

「集。」

ナツメの声が集の意識を戻す。思わず凝視していたそれを隠すように、ナツメが立ち位置を直す。コサギは素早く周りを見渡して、元凶を見つける。それは禍々しい漆黒と紅の混ざつた色で、容姿は只の女人の人。だが、手や足にはべつたりと血の跡。

「……誰。」

『「んにちは。そっちの彼は、はじめまして。二人は久しぶり。』

流暢な言葉遣い。その声はナツメのようで、コサギのようだ。

「お前を私は知らない。」

すらり、と剣を抜いて構える。

『あり？私は何回も会っているのだけれど……。くすくす。』

「答える。お前は誰だ。」

その女性はうつすらと目を細めて、笑った。

『私は……。アサギ。』

対処13・デフォの戦い、結構過激な件について。

「アサギ……？お前が、だと」

『はい。それについては、間違いありません。』

『アサギ、だという事は事実ですから。』

重なる女性の声。周りを見渡せば、既に何人もの同じ女性が立ち同じ言葉を発している。

『私達は彼女から生まれた分身。』

『彼女の意思是私達の意思。』

『アサギは、もしかして……。』

ユサギがぱつり、と呟く。

『貴方の推測する通りです。清らかなる道標。』

『でも、それを言う事は許さない。』

『彼女の意思を行動に。』

『意思を行動に。』

ゆっくりとアサギ達が、三人に向かって歩を進めていく。
同じ言葉を口々にしながら。

『誰に目的が。私が？』

『それとも、私ですか？』

構えをそのままに、二人は目配せをし、警戒を強める。

『いいえ。違う。』

『私の意思は、違う。』

『貴方に用があるの。一緒に来て。』

す、とアサギ達が同じ人物を指す。その先には、ユサギとナツメ、
その二人に守られるようにいた集。

『あ……俺……？』

『貴方に、用があるの。貴方だけに。』

『それ以外はいらない。必要ない。』

『集に何の用がある。』

「大体、集さんはついさっきゲームにログインしてきたばかりなのに……どうして、〈あの人〉が知っているの！？」

『いいの。それは貴方達が知る必要は無いから。』

『貴方達はもう、おしまい。ここまで、この人を連れてきてくれて、ありがとうございます。と言つておくわ。』

少しずつアサギ達の言葉に間が生まれる。だが、歩は相変わらずのスピードで。

『ここから、は、私達が…連れていぐ。貴方、達…終わりに、なる』

「ユサギ、準備！！」

「はい！！！」

そう言つと、ユサギは集の足元に陣を形成した。その陣は青々と光、はらはら、と桜とも何とも判別出来ない花弁が舞い落ちる。その似つかわしくない花弁の景色に、アサギ達は一瞬ながら氣をとられる。その一瞬をユサギは、ナツメは見逃さなかつた。

「オウガサミダレ花弁月下”！！」

「つわあ！！」

舞い散つていた花弁が一斉に集の周りを取り囲み、小さなフィールドを形成して、そして消えた。

『隠した…。その人、渡して。』

『何處に、隠した。教えて。……私、た、が怒る、前…に。』

『怒る前に。と言つ前にもう怒つてますよね？』

ユサギが、くすくす、と笑い、手に鎌の付いた背丈以上の鎌を持つ。

『それに、私達が簡単に教える訳がない。分かつているだろ？？』

ナツメが刀を軽く振り、挑戦的な笑みを浮かべる。

『私達、怒つた……もう、いい…。全て、壊、す。』

『こ、わして…奪う…！』

アサギ達が同時に陣を発生させる。そして、同時に走り出す。

『「そうでなくっちゃ。」「

二人の周りに、風が巻き起つる。

「……、は……？」

集は周りを見渡す。周りは暗闇で、ただ、陣を形成した時に舞つて
いた花弁がはらはら、と光を伴つて空に踊つている。

「あの、花弁の中、なのか……？」

“はじめまして。上南君^{カミナヤ}・集君^{シユウ}、と言つた方がいいのかな？”

暗闇に響く、幼い男の子のような女の子のような声。その声はまる
で新しい玩具を見つけたような、喜びに満ちた声。

“あの子達^{アサギ}にはあの一人の相手をしてもらおつか。僕は君と話した
いんだ。”

「俺はお前の事は知らないし、顔も見せないような相手とは話した
くない。」

“……そういう所は相変わらず、だね。まあ、いいや。”

ぼう、と暗闇に灯る小さな光り。

“顔を見せたいんだけど……、生憎と僕達^{ハタク}には顔が無いんだ。そ
もそもの固有名詞も無いんだけれどもね。だから……”

ぼう、と灯つっていた光りに輪郭が現れる。そして

“これで、いいかな?“ごめんね……。でも、感情は表すこととは可能だ
から”

ゆらゆら、と揺れる光り。微かにその中には何かしらの感情も混ざつている…のだろう。

“さあ、話そうか？何からお話ししようか？”

『……ん、ぐあ！』

『い、たい…。また、死んだ…。5人…私、死んだ。』

『許さ、ない…！私、怒る…。』

ひゅん、と鎌をひと振り。ユサギはそれでも、笑みを絶やさない。「はーふう。疲れったあ…。」

ひゅん、と刀をひと振り。ナツメはそれでも、笑みを絶やさない。「ふ、この程度で疲れるのか？彼方の方に長く滞在しそぎたか？」
「姉様こそ、彼方に居すぎたせいで口調がヒロインじゃなくなつてますよお？」

「…そんなに言える気力があるのなら、まだ、いけるよな？」

「あつたりまえです！！！」

『…あは、ははは。』

『…あはは、はは。』

『…あははは、は。』

アサギたちが次々に笑う。妖艶に、不気味に。

「なんだ…？」

「分からぬないです…。でも、何か危険な感じがします。」

「用心するに越したことはないか…。」

ふおん、と二人の下に陣が形成される。そして、二人に絡み付くよう鎌が腕に、足に。

『あ、はははははは…。』

『あはは。分かった、伝わった。』

『彼女の意思、伝わった。』

アサギ達の狂ったような笑いが、森中に木霊する。
響きわたる声に、二人は背筋に冷や汗が伝わるのを感じた。

対処13・デフォの戦い、結構過激な件について。（後書き）

最初のタイトルに「デフォ」と付いているのは、ゲーム画面で見たら、全てのキャラがデフォされた状態だからです。ｗｗ
だから、本編で頑張って戦闘してもゲーム画面ではちっこいのがわらわら戦っているようにしか見えない。ｗｗ

対処14・超展開！？囚われ姫様は俺ですか！？

『あはは、分かつた。彼女の、分かつた。』

『彼女の意思、反映させる。』

『彼女、反映させる。』

アサギ達が、一点に集まる。一点に集まつたアサギ達は凝縮されて、一人のアサギとなつた。

『おーしまい。あはははははは』

その一人のアサギが手の平の上に小さな毛糸玉を出す。毛糸玉の糸は次第に解けて、少しづつ、二人に近付いてくる。

『これが……私の……。あははは。』

乾いた笑いが響く。それが全て響き終わった時

――ぱち、ぱちゅ――

毛糸の端に灯る光りと同時に鳴る電光の音。

「きょう

ユサギが強化の魔法をかける間際、毛糸が次々に爆ぜた。強化を施されなかつた鎧の結界は容易く爆ぜる毛糸に破れ、二人は地面に派手に転がつた。

「あ、うつ――！」

「……つ――！」

『……ふ。』

ゆらり、とアサギが近付いてくる。だが、二人は爆発の影響で手が痺れて武器を構え直す事が出来ない。

「……え？」

ユサギは思わず声を漏らす。ナツメはそれが罠かどうかを静かに見極める。

「……それで。」

“君は何も思わないの？今まで僕達の話を聞いて……”

「別に。大体、顔も未だに見せない奴の言つことは信じられないし。その言った事が仮に合つてるとしても、それは自分自身で本人に、
彼女ナツメに聞く。」

集は炎に背を向ける。炎は、ゆらり、と揺らめいた。

“何処に行くの？まだ、話は終わっていないよ？”

「帰る。もう長い間居るだらうし、あの一人なら既に戦いを終えているだらうか？」

“駄目。”

ぐにやり、と歪んだ炎が集に周りを囲む。炎が周りを囲んでいるのに、熱さは全く感じない。

“君は必要なんだ。僕達ハベにとつて。”

「どういう事……？」

コサギは思わず己の目を疑つた。ナツメもアサギの首元に当てていた刀をゆっくりと下げる。

「……どういう事、だ」

一人の目に映るもの。それは、アサギ。だが。

―――つ、う―――

その頬に伝うのは、紛れもない涙。アサギの分身である彼女達の頬に伝う涙はとめどなく流れる。アサギはその流れる涙を、その一雫

ワシシミ
アサギ

を手に取つた。

『彼女の意思、伝わる。

『意思が、変わった。彼女の意思が。』

『ああ……そう、ですか。』

アサギは同時に涙を零す。そして、同時に、その涙を手で拭く。

『彼女の意思、受け取つた。』

アサギはその流れた涙を見て、僅かに微笑んだ。

『私にも。私にも、確かに……』

未だに涙を流し、微笑むアサギは、す、と手を差し出す。怪訝な顔をする一人にアサギは屈む。ばさり、と髪が落ちる。

『貴方の願い。届いた……。ありがとう、清らかなる道標。』

「やつぱり……。貴方も……」

「……ユサギ……？」

ナツメが促しても、ユサギは押し黙る。

『それより、も。急いで。〈あの人〉、あのひ、とアサギの体が砂のように、ぼろぼろ、と崩れていぐ。

『こ、のまま……じゃ、連れて……』

「……ユサギ！術の解除！」

「えつ！？あ、はい！？」

ユサギが術の陣を消す。しかし、術は解除されず、集も戻つてこない。

「オウカカギロイ
桜花烈火！！」

「…………ざ、ああああああ…………」

桜の花弁が刃のような硬度を持つて、術を施した空間を切り裂いていく。そこに出てきたのは、燃え盛る透き通る炎の壁。

“ああ。もうお迎えが来ちゃつたんだ”

声が少し残念がり、光りも、むらむら、とその光りを弱めていく。やつと、これでこの空間から別れられる。

そう、集は思い、安堵の吐息を零した。だが、その安堵は次の声で微塵も無く、ぶち壊される。

“なら、場所を変えよつか？何処がいい？”

「…………は？」

事態に追い付けない集を他所に、声に嬉しさが戻ってくる。

“そうだ！君を攫つて、あの一人にく僕達^{ぼく}のお城まで来てもらおうー。”

さらり、と告げられた誘拐宣言。集は背筋に冷や汗が、つう、と伝うのを感じる。しかし、気付かない振りをした。

「はあ…。もういい。俺は帰る

“ああ。見てもらおうかあ…。”

炎に闇が出来た。そこからは、日の光りが差し込んでいる。集はそこが出口だと信じて、そこに走り出す。そこまでの距離は無く、直ぐに

たどり着いた。

——ばんつ　　ばん　　ばんつ——

「…………は…？なんで…？」

日は差し込んでいるのに、まるで見えない壁があるかのようにその先へと進めない。

“ねえ。見えるかな？一人の姿が”

「姉様！あれ……！」

「！！」

透き通る炎にほんの少し間があり、ユサギとナツメそこを覗き込むと見えたのは。

「ユサギ！ナツメ！！」

集は一人の名前を叫ぶ。しかし、一人には聞こえてはいないようだ。二人も必死に見えない壁を叩いている。

“さて、と。舞台も、役者も揃ったね 始めようか、ゲームのはじまりい……を”

炎が、ごお、と勢いを増して集の周りを縮めていく。さつきまで無かつた炎の熱さが肌に突き刺さる。

「…いたつ！」

ちくり、と何かが刺さった感触がした。腕を見ると、赤い血が、つう、と流れ手に伝い、落ちていく。

“痛い？ねえねえ、痛い？ゲームでは痛覚は感じないと思つてたあ？”

そう声が、けらけら、と笑う。その間にも、炎は狭まり、炎からたまに飛び出してくる刃は集に襲いかかってくる。

助けを呼びたくても、聞こえない。

大声で叫びたくても、声が出ない。

それ程までに、集の精神は疲弊していった。襲いかかる刃にも、次々に増える傷にも。止めどなく流れる血にも、注意も恐れも感じなくなっている。その疲弊しきつた心に入り込む声。

“ねえねえ。苦しいんでしょう？あ、違った。苦しいと思えないほど疲れてるんだつけかあ？”

「…………つ、う。」

小さく呻いても、集は何も聞こえない。
それでも、声だけが耳に響いてくる。

“苦しい？痛い？疲れたあ？なら、思つてよ。帰りたいって。戻りたいってえ。”

声に思考が流されていく。それもいいか、と思い始める。
ただ、心に思うのは。

(帰りたい……。戻りたい。元、に)

そう、それだけを強く願う。

“きひつ。きひひ……。”

声の何処か壊れたような、嬉しそうな声を聞きながら
(戻、り……たい。……帰、り……た)
集の意識はゆづくりと閉じていった。

対処14・5番外編！－御アクセスありがとうございますの話。

ナツメ「さて、この話も12月7日の第14話で1000アクセスを突破した…全く、嬉しい限りだ。」

ユサギ「と、いうことで。今回は番外編としましてー、キャラ紹介やら、裏話やらなんやらをしてもらいらしいのでー、それをやっていきたいと思つていまーすと。」

「パンパカバーん…」

ナツメ「安っぽいファンファーレが終わつた所で、早速始めようか。」

「ユサギ「先ずは、私達のキャラ紹介を！」覗く下さい」

「ナツメ・イウエ・リストイアート。齢16。」

名前の其々に意味がある。

ナツメ…生まれ墮ちた際、最初に愛情を与えてくれた人が付けてくれた名。愛情の真名を持つ神の名もある。

イウエ…ミドルネーム。ナツメの母親の名前、イウエネスティアから愛の印に与えられた。意味は、希望の雫。

リストイアート…神と同等の、もしくはそれ以上の“神力”^{チート}の力を有する者に与えられる称号のようなもの。意味は、全てを繋ぐ。

集「じつして見ると、ナツメの名前って長いなあ、とか思つてたけれど…」

ナツメ「それが？長いのは確かだが。」

集「いや、いい名前だなって。」

ナツメ「……ふん／＼／＼

—ユサギ。齢13。—

世界に生まれ墮ちたナツメ以外の子の中で、最も強い靈力を有し、聖女として人々から慕われ、崇められていた。しかし、あくまで崇める範囲の中で慕われていたので人からの愛情に飢えている。なので、自分は人とは違う存在だと過剰意識してしまい、人と接する事を極端に嫌っていた。しかし、ナツメと出会つて自分が普通の人と何も変わらない事を知つて感情を出すようになった。

ナツメ「私よりも設定が細かい気がするんだが（怒）」
ユサギ「そりやあ…一応のキーキャラでしたから」

集「でした？過去形になつてるぞ」

ユサギ「はい 今ではキーキャラも変わつてしましましたあしね

集「誰だ？今のキーキャラつて？？」

ユサギ「…（・_ゝゝ_）」

—上南集。齢18。—

三年間、自宅警備員を続けていた少年。実は、かなり頭の回転が良い。いい知恵が働くこともあるれば、悪知恵が働くこともある。

集「ちょっと待て。俺の設定、少なくねえか？」

ナツメ「それは当たり前だろう。」

ユサギ「当たり前ですねえ。」

—アサギ・リヴェリアス。齢19。—

アサギもナツメ同様に、名前に意味が込められている。

アサギ…生まれ墮ち、誰にも愛を与えられず「墮落者」となつた者

に与えられる称号。

リ、ヴェリアス…アサギの名よりも深く闇に墮ちた者が得られる称号であり、尚且つ闇の力を振るう資格をも得られる。

「サギ「要は、典型的な敵キャラとこいつ」とですね」

アサギ・ハルヒ

集、今何か聞こえた気が？」

“そして、遂に「僕達」の紹介（ワタクシ）”

“うそ。嘘。嘘だよ。”

集「ん？また何かいたような……」。

ナツメ、—d(—)一
夏夕紅の山和は山ニモニタ(

集一
？」

ナツメ「ほん。これでキャラ紹介は終わつたな。さて、次だ。次
は...」

「ユサギー、裏話ですね。」

かわわ

ユサギ「作者から裏話を聞いてきたので、テロップも交えて、どうぞ

L

ユサギ「裏話そのへーーー』の作品も、もう一つの作品もそうですが…最後はどうなるか、分かりません(・_・)』…との事です。」

考えていないとこう訳ではなく……」話はある程度は考えています

よ(・へへ)『だと。』

ユサギ「つまり、これから私の扱いも作者の気まぐれ次第ですねえ……(へへへ)」

ナツメ「はあ……ある程度考えているのが唯一の救いだな。」

ユサギ「裏話その2いー『キャラのモデルは、断言します。リア友です(・・・・;)周りのリア友は良いモデルになりますww本人には内緒ですがww』ですって。」

ナツメ「因みに『モデルと言つても、全員ではないですよwwナツメはオリジナルですし声しか出でていないくあれ>もオリジナルですからwくあれ>が友達だつたら、絶対に嫌です(・・・・;)』……といひことは、ユサギは誰かモデルがいるんだな。」

ユサギ「……ええー……」

ナツメ「さて裏話その3。これが最後のようだな」

ユサギ「……これは……えいつ」

びりり。びいいー。

ナツメ「ユサギ、どうした?」

ユサギ「ネタバレの裏話だつたので皆様には見せられません(*、
-*:-)」

ナツメ「……そうか。分かつた」

ユサギ「あ、もう一枚。えつと『大体の更新時間は、夕方なら1-8時。夜なら、22時から0時の間に予約投稿をしています。』との事です。」

ナツメ「どうでもいいな。」

ユサギ「どうでもいいですね。」

ユサギ「さて、長かつたこの番外編もおしまいです。ビードしたか

ー?』

ナツメ「最後はぐだつていたがな。」

集「まあ、突然の事だつたから仕方がないな。」

ユサギ「と、いうことで次は本編でお会いしましちう」

ナツメ「またシリアスに戻るがな。」

集「……（、　、　）ハア……」

ナツメ「それでは、また。」

ユサギ「それじゃあねえ」

集「…本編で、お会いしましちう…。」

対処14・5番外編!!御アクセスありがとうございますの話。（後書き）

・・・・何かすみません。

せっかくの4桁だったので、調子に乗りました。後悔しないです
（・・・・）書いていて楽しかったです！ナツメ、ユサギが言
つていた裏話はネタではなくて、マジの裏話です（・・・・・）
（・）反応が怖い…。

対処15・ラスボスの暇＝一気にジャンプｗｗ

「え……？」

ユサギのあつけらかんな声が聞こえる。

「…どういう事だ？」

ナツメも続けて、状況を理解する。

透き通る炎が消えた後、あの空間に向かつた一人の目に入ってきたのは、何もない、ただ花弁が舞う暗闇。そこにいた集の姿は何処にもいない。

「もしかして、〈あの人〉に……？」

「くそつ！」

ち、と舌打ちをしたナツメは自分の足元に落ちていた何かを拾う。それは、安っぽいペンドント。祭の夜店で売つていそうなペンドントを。

「それは……集さんの……」

「アイツの……？」

暗闇の中でも存在感を示すそれからナツメは田^たが離せなかつた。声が響くまで。

“ 二おんにちはーっ ”

「 「 ー？」

光りが、ぼう、と現れてゆらゆらと揺れる。

「貴方が、集さんを……？」

“ むう。言いがかりはやめて欲しいなあ。〈僕達〉は助けてあげたんだよ。寧ろ、感謝して欲しいなあ ”

「感謝、だと……！」

ナツメの声に怒氣が混ざり、刀を握る手が強くなる。

“彼は疲れきっていたから、僕達のお城に運んであげたんだよ？”

「疲れきつてしまつよくな事をしたのは、貴方ですよね？」

ユサギも鎌を握り締めて、構える。

“君たち、彼の事が心配っぽいからあ…会わせてあげる？”

炎が暗闇の中に地図を映し出す。それは複雑に入り組む構造をしている。

“それが、僕達のお城への地図。ちょっと複雑だし、雑だけれど…まあ、頑張って”

炎が、ふ、と消えて微弱な光りを発する地図がナツメの手に落ちる。

「姉様……。」

「ああ、ここまでお膳立てをしてくれていいんだ。行かない訳がない」

空間を解除して、森に戻ると

「あ、れ……？」

アサギは消えていた。

“ぐすくす…。あの一人は本当に飽きない。”

部屋に響くあの声。

……………

ゆつべつと、ベッドに座る。眠り続けていた主を起しかねこよひ。

ベッドの主は、集。

「……………」

何か謳言を呻く事も無く、寝息をたてる事も無く。

ただ、何かを拒絶するかのよつて音々と眠り続けて約三日。まるで、眠り姫のよう。

“まあ、姫に見えない事も…。”

声に笑いが含む。ベッドに腰掛ける声の主は冷たい集の手をそつと触る。声の主はまたゆつべつとベッドから離れる。

“わい、と…。次のアクションを起こしますか。”

ぱちっ、と指を鳴らせば

ー…………ふお、ん…………ー

アサギが膝をついて、悶まつていた。声は、楽しそう。

“あの一人をある程度… そうだなあ… ケルベロス冥界門番の寝床ぐらこまでも、ワープしてくれればいいや。頼んだよ?”

「…………はい。」

声の主は思に出した、といつぱり、元ぱりと、と指を鳴らして

「…………つ、ひり……」

ぐこ、とアサギの顔を近付ける。アサギの表情は恐れで歪んでいる。

“もし、あの一人に情けとか…。助けたりしたら、容赦しないから？”

にこり、と囁う微笑みに、アサギはがたがたと体を震わせる。その様子に満足して、顔を離す。

アサギは、それでもガタガタと僅かに震えていた。

“それじゃ、よろしくね”

「は、いつ……。」

アサギが震える声で、そう言つと

――ふあ、ん――

夜のように漆黒の黒の光りの筋となつて消えた。
ベッドの主は、戻らない。今だ、昏々と。

集がいなくなつて、三日。

二人は直ぐに村を発ち、道のりを急いだ。アイテムも補充せず、途中の村に寄ることもなく。

そんな無茶をしていけば、体の体調が悪くなるのが至極最もで。實際、ナツメの顔色が日が経つにつれて青くなつている。

ユサギが

「姉様。一回、何処かで休まないと……！」

そう言つて、制止をかけても。

「大丈夫だ。先を急ぐぞ。」

ナツメは頑としてそれを聞き入れない。ユサギはナツメの頑固さを、知つているため、強く言つても効果は無い事は分かつていてる。

だから、ユサギはナツメの少し後ろを歩き、ナツメの体調を気にかける。

「姉様……つ？」

ナツメの歩みが止まって、ユサギはナツメにぶつかった。

「…………。」

ナツメからは、膨大な怒氣と殺意が溢れ出す。ユサギが後ろから、ひょい、と顔を出すと

「……こんにちは。」

アサギが少し疲れた顔で微笑む。

「何の用だ？」

「貴方達を、城まで連れてくるように……との事です。」

「どうして、そんな事をいきなり……。」

ユサギも、鎌を出して構える。

「このまま、のらりくらり来るのも退屈だから……だそうです。」

「……つ、つ……」

「姉様！？」

ナツメの体が不意に、ぐらり、と揺れる。

「……どうする？一緒に来る？」

ナツメは刀を支えに、立つ。

「行くに……つ決まっている……！」

アサギは、悲しそうな、嬉しそうな、そんな感情が混ぜられた微笑みで

「分かりました。」

二人の足元に黒の陣が浮かび上がる。

それが強く光りを放つた時、二人は消えた。

対処16・ラスボス城はチートだらけwww

「つ……。」

黒の光りが周りに流れる。その中、アサギは只、流れる光りを感動も何も思わないまま見つめる。

漆黒の黒がそのまま自分を染めてくれればいいのに。

そう、アサギは思いそして願つた。

中途半端に黒に、闇に染まつた自分を自己嫌悪する。と、同時にあの時、その手をしっかりと握つていれば。

あの時、その手を離してしまわなければ……。

そんな後悔ばかりが胸に去来して、締め付ける。

ふ、と横を見ればナツメとユサギが気を失つてている状態で、自分と同じくゆっくりと落下している。気を失つているのは、自分が^{ワープ}転移させたと同時にそういう魔法をかけたから。

「……何を、今更。後悔も、過去も、何もかもを捨ててここまで堕ちてきた。」

自嘲するように、く、と嗤う。次第に、光りが散り散りになり視界が開けてくる。

「…………つ！…は、あつ……。はあ、はあ。」

長い間眠り続けていた集が額を汗ばませて、目を覚ます。

周りを見渡してみれば、そこはまるで最上級ホテルのスイートルームであるかのようにきつちりと手入れされているアンティーケの数々が目に入る。起き上がるうとすれば、腕に力が入らずベッドに寝つてしまつ。

「…………いたつ。」

力の入らない腕を見れば、ほぼ全体に包帯が巻かれている。しかも、

その箇所は全てあの刃に付けられた傷があつた場所。

「どういふ事だ…。」

“ああ、やつと田を覚ましたんだね。”

「う…………う…！」

ユサギが意識を覚醒させると、ナツメが暗闇に向かつて魔法を放つていた。そして、暗闇から

—おおおおおおおおおおおおお…—

耳を劈くよつな咆哮。その唸り声を聞いて、ユサギは暗闇の中に居るものを推測、看破した。

「まさか、冥界門番…？」

「ユサギっ！－避ける…！」

ナツメの切羽詰まつた声にユサギは直ぐ様横に飛び退く。その瞬間。

—おおおおおおおおおお…—

「あ、がつ…………」

「姉様…！」

ユサギは素早く陣を発動させる。

「護花”つ！」

ユサギが当初いた場所の壁に叩きつけられそつだつたナツメを睡蓮の華が優しく受け止め、同時にある程度の傷を癒す。

「ありがとう。」

「姉様…。これは一体…？」

「アイツにしてやられた…！」これは冥界門番の寝床だ…！

「じゃあ、あの咆哮は、冥界門番の…」

「…………おおおおお、おおおおおお…」

ゆっくりと地響きを鳴らしながら、冥界門番ケルベロスが姿を白日に晒す。全身を漆黒の毛で覆われ、ギラギラと赤い目を光らせる様子はゲームであっても恐れを感じさせる程にリアルで。

「ユサギ、来るぞ…！」
「はーい！」

“おはよー。体は大丈夫？かなり眠っていたみたいだけれど。”

声にいつもの、何処か楽しそうな感じは読み取れない。その事に集は何処か違和感を感じた。

「どうするつもり、だ？俺を。」

“どうするも何も…。只、君を返してあげようかなって”

「何も企みがある？俺をこんな事にしても、何もメリットはないぞ。

」

“そうだね。全く、何を考えているんだろ？ね…。”

集が起きてから感じていた違和感。それは、声。

「お前、誰だ…。」

“私？私は、僕達貴方が今まで会った人のもう一人の人格。”

声の主が暗闇から、月の光りの届く所へと歩む。

「…………。」

アサギは只、冥界門番と対峙する一人を冥界門番の背から見ていた。
元々、冥界門番はゲーム上ではアサギの祖先が創り出した物なので、
唯我独尊の冥界門番もアサギには懐き、また言つことも聞く。そのため、
背に乗つっていても振り落とされる心配がない。

（……あいつ、もしかして……。）

アサギが開戦当初から感じていたナツメの違和感。戦いの剣にブレ
は見えない。否、ブれないように無理しているのだとアサギは看破
した。

（だから、やつきの冥界門番の一撃も避けられずに吹っ飛ばされて
……。）

勿論、相手の具合が悪かったとしても、アサギには関係ない。アサ
ギは、それでも早急に止めをさす事はせず、様子見の状態で留まつ
ている。勿論、止めをさす気も更々無いのだが。

「冥界門番。ターゲット、アタック。」

——おおおおおおおつおつおおおお——

冥界門番がナツメに思い切り、腕を振り下ろす。

ま、そんな事今は関係ないわね。さて、まだ僕達わたしの意識が主イニ
導シアチフ権ケルベロスを握っている間に……。』

声の主はきらきらと輝く髪を揺らしながら、集の腕を軽く引っ張る。
それでも、腕は離れないかのように力が籠らず、だらん、と下がる。

“ふう…。困ったな。余り力を使っちゃうと僕達わたしの事を勘づかれるかも…。”

すらり、とした白い腕が集の腕に、足に陣を灯していく。

「これ、は…？」

“く僕達わたしの意識が保たれる間だけ、貴方の力を戻してあげる。さ、早くここから…。”

腕を掴む白い腕を、集は払つた。少し悲しそうな顔で、声の主は腕を引っ込める。

「お前は本当に誰なんだ。ビリして…ビリして…」

“…君にだけ、教えてあげる。く僕達わたしとく僕達はくの事を。”

「姉様…！」

ユサギの叫びに近い声が響きわたる。

「……………」

叫ぶ事もままならないまま、ナツメは横風よこかぜに吹っ飛ばされる。壁に激突して、そのまま崩れる。

(やつぱり…。)

ナツメの体調は悪化の一途を辿っていた。顔からは、血の氣が引いていたし、体もガクガクと小刻みに震えている

。剣無しでは体も支えられない程に。

「……………」

「……………」

最後の魔法を唱えると同時に、ナツメは意識を手放した。

その魔法も冥界門番の前では只のお遊び。桜の刃は軽く弾かれて。

—————おおおお—————

唐突に、冥界門番ケルベロスの動きが止まった。

対処17・ラスボスの中の暁。

「止まれ。」

アサギが冥界門番にそつ命じると、冥界門番は犬のように座り込んだ。

「……何?」

ユサギが、ひゅ、と鎌を振り、牽制する。

「…………。」

アサギは無言で倒れているナツメに近付くと、ナツメを膝枕する。

「光護安息」

ぼう、とナツメの全身に光りが走り、ナツメの顔色が僅かながら回復する。

「貴方、一体…………。」

「私は、同じ人を傷付けてはいけないと……思ったから。」
ぽつり、と呟く。

「……貴方も、やつぱり。」

確信めいたユサギに、アサギは見えないように微笑む。

「私は…………人間の一人」

“この階段を一気に降りていけば、あの一人の居る所が見える場所に出るわ。でも、きっと何かを差し向けられているはず……気を付けてね。”

「あ、でも…………。」

集は後ろを、暗闇に微笑む声を振り向く。

声は少し前に出ると、集の頬に手が触れる。その手は驚いて、身を引いてしまう程冷たく、そして、その奥には暖かさがあった。

「…俺が行つてしまつたら、お前はどつなるんだ。…お前が言つ
「僕達」に…」

“それは、^{わたし}私達の問題。貴方が、そして^くあの子^くも考える必要は無いわ。”

するり、と手が集の頬から離れる。そして、その代わりとばかりに暗闇から声の主が顔を見せる。

“さあ、早く行きなさい。まだ押さえ込めていいにしちゃない。加護が続いている間に…”

ふわり、と何処か安心するような微笑みに集は再び歩み始める。最後に、と後ろを振り返れば

“最期に、ゲームの中であつても…。貴方と再び会えて、良かつた。”

「かあ、さん…？」
後ろ髪を引かれながら、集は階段を降りていった。

幼き頃に見た母親の面影を、先程の微笑みに重ねながら。

“全く、何時まで経つても…変わらないんだから。”

“すう、と意識が薄らいでいく。

“でも、あの子達は…光。きっと、貴方の闇も照らすわ。”

瞳をゆっくりと閉じていく。自分の時間が終わる。

“………… わよつなり。”

「このゲームは、古い機種だが……ネットゲームとしても接続は可能なんだ。」

ナツメの回復を待っている間、ぽつり、とアサギがユサギに話しかける。

「……ネットから、貴方はここへ？でも、あの事件の時にやつて来たにしては……。」

「人間の気が感じられない、か？」

「くくり、とユサギが頷く。その正直に、アサギは苦笑する。

「ああ、そうだろうな。私はこの世界に留まりすぎている。」

「何時から……？」

ぎゅ、とアサギの手に力が籠る。

「最初……。かなり、初めの方だったかな……自分でネット接続をした」

「どうして、そこまで……。」

二人の間に僅かながら生まれる沈黙。その沈黙を破ったのは

「…………う、あ」

ナツメが苦しげに声を上げる。

「姉様！！！」

「……回復したか」

す、とアサギが立ち上がる。すかさず、ナツメは追撃するために刀を構える。だが、ユサギに押し留めるように説得されて、渋々、刀を鞘に戻した。

「貴方は、これからどうするの？」

「……お前達を助けてしまったから、くあの人々から何かしらのアクションはあるだろう……。全部、私の問題だから。」

「待て。」

「姉様…？」

「全部、聞こえていた。その上で、一つ、聞かせて欲しい。」

ナツメは立ち上がる。アサギは、無視せずに立ち止まり、ナツメの次の言葉を待つた。

「お前は、ゲームのキャラの……男がお前なのか？それとも

「今が、本当の私の姿。男の姿は、単にゲームのシナリオ上で必要だっただけ。」

アサギはそれだけを言つと、冥界門番に何かを呟いて、
さつさと何処かへと行つてしまつた。

「……アイツは、アイツも…。」

「姉様…。酷な事かもしだせんが…」

「ああ、集を探しに行こう。」

“ アイツ…！－何なんだ！－勝手に意識を乗つ取つて…！”

荒れた声は、長きにわたる階段をひたすら降りていた集の耳に確かに届いた。しかし、声の大きさ、木靈からして、距離はまだ遠いかに思えた。

「……早く…。」

体中を駆け巡る痛みに集は蹲り、顔を苦痛に歪ませた。

それは、加護が消えつつあるという事。

足がガクガクと震えて、力が入らない。

「……痛つ。」

唐突に、足に走った鋭い痛み。加護が消えていく痛みではなく、しつかりと、質量が重くのしかかっている。

「あ……い、う…」

後ろに立てかけてあつた筈の騎士の鎧が倒れ、足にのしかかってい

る。動かそうとしても、騎士の鎧は重く、やがて動き出さない。それでも、足音は、苛立つの音は近くなつていぐ。

“ イハ ちか……。わひ ひひひ ”

「……………。」

慌てて息を殺す。そして、心の中で祈る。来なことひ、と。

(…………ナ、ツメツ……)

「…………いたか。全く。」

(…………え?)

ふ、と顔を上げるとそこには、にんまりと笑っていたナツメが集を見下りしていた。

「どうして、ここが分かったんだ?」

恐る恐る聞いてみると。ナツメはその様子に口を押されて、笑いを堪える。

「…………。まあ、その話はこれが終わってからこしよひ。」

ナツメはわづかうと、集の後ろの暗闇に視線を投げかける。

「なあ、やうだわう?」

“…………わひ、ひひひ。……”

暗闇の声はにやり、と口を弧を描いた。

対処18・ボスと勇者と時々モブ

「さて、漸くシナリオ通りの役者が揃つた。」
ナツメの相変わらずの挑戦的な微笑みが、集には酷く安心感を感じさせた。すらり、と伸びる刀も頼もしい。
何気にナツメは集の前に、守るように立つ。

“……〔冥界門番〕は、どうしたのさ。”

「さあな？そこは、確かめてみれ」

ふつ、とナツメが姿を消す。集が姿を探そうとした瞬間。

「つづばー！」

ナツメの刀が暗闇を一閃した。暗闇の中にいたはずの声の主は

“あー、危なかつた。それにしても、〔冥界門番〕を倒す事がこの短時間で……。”

いつの間にか、二人の後ろの新たな闇にいた。

「いい事を教えてやろうか？」

また、ひゅ、と刀を振る。刀身には輝く白銀の光が纏う。

「お前は、一人だ。」

“…………つ…………”

声の主の気配に怒りが、同時に嬉しさが吹き出す。

「そんな事より、楽しもつじやないか。折角のサシなのだから、な。

」
ナツメは集の後ろの鎧を刀で一閃、排除すると立ち上がらせた。

「そのまま後ろの階段を突っ走れ。」

「

「後ろの階段……。でも、来た道を戻る事に」

「いいから。」

集の背中を、どん、と押すとナツメは微笑みをそのままに刀身を暗闇に突きつけた。

集は戸惑いながらも階段を上がつていった。

僅かな沈黙の後。

「……そもそも、姿を見せてもいいんじやないか？私はもう分かっている。お前がく誰の姿へ使つていいのかを。」

“ふう、ん…。ま、いいや。いいよ。”

ゆつくりと暗闇が明るくなつていぐ。声の主の姿が現れる。「やつぱり、な。まあ、それでも私のやることに関係ない。」

“やつだと、思つ？”

声の主は、漆黒の髪のアサギだった。

「はあ……。はあ…。つ痛！」

鎧を退けて直ぐ足を動かしたため、足の怪我が開き、酷く痛みがはしる。足からは血が滴り落ちる。

「まだ……っ」

「はーい お待たせしましたあ。やつと追いつきましたあ……。」

「ユサギ！ー」と……？

ユサギは大きな犬のような物に跨つて、集を見下ろしている。

「これ……！－！冥界門番ケルベロスつ……！－？」

「あれ？かなり終盤の敵ボスの筈なんだけど？？」

「ああ、ゲームマニアの俺をなめるなよ。これぐらいの物は基本知識だぞ。」

「ゲームーー詰まり、ヲタクだねえ？」

「うぐう」

「アサギは冥界門番から降りる。

「姉様は…？」

「「」の先にいる。今は戦っている。」

「そう、ですか。貴方は先にここから脱出して……」「俺も行く。…足でまといにはならないようにするから、だから。」

「アサギは集の決意に満ちた目を真っ直ぐに見ると

「では、乗つてください。この子は強いですしね」

再び冥界門番に跨ると、集に手を差し出した。

顔を逸らしながら、集はその手を取り、冥界門番に乗った。冥界門番は嘶く。

「今まで、あの人は姉様を躲し続けてきたけれど、もう限界の筈。
「」で姉様は全ての決着をつけるつもりです…！」

「氷山茶花！」

氷が渦となつて所々凍らしていく。それでも、アサギはひらり、と躲していく。ただ、その繰り返しで自分から攻撃を仕掛けている事はない。それがナツメは疑問だった。

「どうして、こない？それ程までにお前は弱かつたか？」

“いや。切り札は最後までとつておくものだと思つてえ”

「これでも、そんな事言えるか？」

ナツメは大きく飛び上がり、アサギを見下ろす。

「お前に、一つ、クイズとこいつか？」

ぱち、と何処かで何かが弾ける音。

「時には潤う恵みとなり、時には生命を奪う凶器となる。人の摂取する飲食物のほぼ全てに含まれている。大量に摂取し、その状態を放置しておけば死亡する。」

“……それが？”

「分からぬいか？なら、答え合せといこつか」

ぱちん、と音が多くなり、数も増えていく。

「……ジハイドロジョンモノキサイド。」

「……待つて
ユサギが冥界門番を止める。その先には、何か透明な壁がある。それ
に触れてみると

「…………とぶ、ん…………」

手が壁の中に沈んだ。手を抜いてみると濡れでいる。

「これは…………？」

“ジハイドロジョンモノキサイド…………？”

「分からぬいか？」

す、とナツメは手を開く。手には何かしらの液体が滴り落ちている。

「漢字表記にしようつか？……一酸化二水素。」

ぱち、んと音が止む。

「つまり…………。」

「水…………？」

ユサギが壁を構成するものを推測する。

「どちらにしても、この壁はさつきまで無かった。……そうですね

「ああ。俺はここから出でてきたからな。」

「といふことは、姉様がこの壁を創つたのでしょうか。」

集は冥界門番から降りると、再び水の壁に手を付ける。

「アソブが創つたといふことは危害を加えるものじゃない。」

「ええ…………。」

「なら、いじりを通る事も出来るよな？」

ユサギは集の提案に驚き、しかし、その提案を排除することはしなかつた。それだけ、集にもナツメにも信頼を寄せていたといふことだから。

「……ここで待っていて。」

ユサギは冥界門番の頭を撫で、集と同じよう^{ケルベロス}に降りる。

「……さて、行く前に。」

ユサギは集に魔法をかける。魔法は、すう、と集の体を通る。

「ゲームとはいへ、一応の保険としてこれを」

「……よし。通るぞ」

とふ、と集とユサギは水の壁に身を委ねた。

“一酸化二水素…。H₂O…！？”

「アサギ」はいつの間にか自分の周りに水が満ちている事に気付いた。その水は膝までの高さにまで満ちていた。

「！」明答。ジハイドロジョンモノキサイドは水。『

“…つお前にそのような力は無い筈っ！！”

「口調が変になつてゐる。まあ、この力の使い方を知つたのはつい最近だからな。』

“……壊す。壊して、君を永遠に玩具にしてあげるぅぅ…！！”

「お別れだ。」

ナツメは、少しづつ満たされ始めていた水量を一気に増やす。増えた水は津波となつて「アサギ」を飲み込む。

「アサギ」は特に抵抗する事なく、水に飲まれた。

対処19・最終決戦！？はド派手に！！

水の壁を抜けた二人はナツメを見つける。ナツメは水面に僅かに足を浸けて、波紋が浮かぶのを只、静かに見ている。

ナツメの水面の下には、**「アサギ」**が上のナツメを見上げている。
特に騒ぐことも無く、此方も静かに。

如様！」

ああ、一人共無事たったのか

「何をするんだ?」

「イツを倒してケーレはクリアだぞ? だから倒す
広がる波紋は水に沈んで、『アサギ』の身を締め付ける。

爆せて消え云“禍災尾”

周りを満たしていた水が一瞬にして赤く、血のようにな染まる。その水は、蒸発していく。

爆ぜる。

一
ノ
リ
モ
ト
ル
一

水が一気に消失、炎へと変わった。炎は「アサギ」を包み込み、轟々と燃える。その様子を、ナツメは水の中から二人を引き上げながら見守る。

意外と笨気なし

ばちばち、と燃え盛る炎を眼下に見ながら集は言う。

それで、緑村からいいけれど

お返せうどんを貰ひました時。

ばひゅつ！！

集の体が炎から出てきた何かに思い切り引つ張られ、炎の中に引きずり込まれる。ナツメが助けようと、炎に突っ込む。

「……つうわー！」

ユサギはいきなり勢いの強くなつた熱波に当たり、思わず顔を手で

押された。それから直ぐにナツメが炎から弾き飛ばされる。

「姉様！？彼は……!?」

「つか。しくじつたアイツはまだ倒れていない……！」

かしゃん、と刀を素早く手に持つと

「…………っはああ……！」

大量の水を流し、炎を一気に押し流す。炎から現れたのは、飘々とした表情の「アサギ」と

「…………っう、うく」

首を持ち上げられている集が苦しそうに呻いていた。

“あはは。こんなちつぽけな水と炎で、倒せると思ってたあ？そんな簡単じゃないよ「僕達」はあ”

ぎり、とナツメの手に力が籠る。

「集さんを離して下さい……！」

ユサギが先制で、「アサギ」に鎌を振る。しかし、鎌は空を切り、逆にく「アサギ」によつてさつきのナツメのようく吹つ飛ばされる。

「……あつ、いた……っ。」

くらり、と頭を打つた影響で脳震盪が起こり意識が揺らぐ。

“ねえ。”

「つーーーーー！」

いつの間にか近くに来ていたく「アサギ」によつて、手首を掴まれる。

“く僕達くと君のあの事。忘れたなんて、言わせないお？”

「あ……っう……！」

ユサギは鎌を落として、しかし、その場を動けないでいた。

“ねえ……。”

ねつとりとした声がユサギの耳に、頭に響く。

「あ……う……つ。」

「うう……。」

頭の痛みにナツメは起きる。愛用の刀を持つ利き手からは血が流れ、とてもじゃないが刀を使える程の力は出ない。仕方なく、ナツメは利き手じゃない方の手で刀を持ち、周りを見渡す。

「ユサギ……？ 集……！？」

周りを見渡しても、一人の姿は見えず、所々に炎が見えるだけ。

「……姉様……。」

「ユサギ！－！」

ナツメがユサギに駆け寄ると

－ひゅ……－

ナツメの喉元に、鎌が当たられる。ナツメは急いでユサギから離れて、刀を構える。ユサギの様子を伺おうとしても、その瞳からは何も感じない虚無。

「ユサギ……？」

「……覚悟つ。」

次々に振られる鎌にナツメは避ける事しか出来ない。刀を振ろうとしても、ユサギを傷つけたくないという欠片の情がそれを邪魔して、防戦一方だ。

「……どうしたの？ 何故、反撃してこないの。」

抑揚の無い声で、虚無の瞳で、ユサギは問う。

「それは、こいつちの……台詞だつ……！」

「あうつ……！」

やつとの思いで鎌を切り返すと、ユサギは派手に転がる。しかし、

鎌は離さない。ナツメは刀をユサギの喉元に突きつけて、制止しようとするとする。

「ユサギっ……！」

「……だから？」

手が切れるのも構わず、ユサギは刀の刃を持って、ぐぐ、と押し返す。

「ユ、サギ……？」

遠くから見ていた集は首を絞められていても尚、叫ぶ。当然ながら、その声は届かない。

「くそつ……は、なせ！」

「……離したい、よ。」

「アサギ」の手の力が弱まり、集は地面に叩きつけられる。

「助けたい、よ。でも、私……は」

「……？お前、誰だ……？」

「ねえ……。どうなってるか、知りたいですか。」

「……その口調、…………ユサギ？」

「ねえ、早く攻撃しなよ。どうして、しないの？」

「……。そうか、漸く分かった」

ナツメは刀をユサギの手から引き離す。ユサギは攻撃されないと分かつてはいる為、鎌を持ちながら、くねくねと舞つている。

「ほら、早く……。」

ぐる、と鎌を回して挑発する。ナツメはその様子に僅かに目を細めると

「……ひゅっ……」

刀を構えて、ユサギに特攻してきた。その行動を予測していなかつたユサギは反射的に鎌で刀を押し返そうとする。が

「…かしゃん…」

反射的に返した為、力が上手く入り切らず、鎌は弾き飛ばされる。

「チェックメイト。」

「殺すの…？私を」

「ああ。」

「どうして？私は…」

「お前は、ユサギじゃない」

「どういう事だ…？」

「私の体は、ここ。あっちにいる私は、あの人。^{ハルヒ}。私の姿を複製されていてるから…。」

「お前とアッシュに何があるんだ？」

「……………それは。」

「あううつ…！」

ユサギが吹き飛ばされ、一人の近くまで転がる。ナツメはユサギの喉元に再度、刀を当てる。

そして

「チェックメイト。ゲーム終了だ。」「一閃、切る。

対処20・ゲームの崩壊。

あらわら光る宝石を眺めている。

直ぐに、夢だと分かつた。

その宝石を手に取ると、宝石の中に何かが見えた。

凄く、幸せそうな笑顔がそこにはあった。

その、笑顔が散りばめられた宝石を私は粉々に壊した。粉々になつた宝石は、風に吹かれて消えてしまった。

そうしたら、私の記憶にもあつたその笑顔が。

やつぱり、同じように粉々になつて消えてしまった。思い出すことも出来ない。

宝石を壊せば壊すほど、新たに宝石は何処からか転がってきて。その宝石にも、やつぱり笑顔が満ち溢れていって。

だから、全て、壊した。

“あ……ああああああああっ！……”

ユサギの姿が薄れて、〈アサギ〉の姿に戻る。首からは、とめどなく赤い光が零れては消えていく。〈アサギ〉の叫びが響き渡る。

「これで……？」

ユサギが今だ信じられない、というかの様子でナツメに問う。

「終わり…の筈。」

“あ、ああ。……ひ、きき…ひひ”

ゆらり、と〈アサギ〉が立ち上がる。首を押さえる手が離れる。手には赤い血がべつとりと付いていて。

“ああ…。もう、ここはおしまだ。…残念だな…。折角、色んなギミックとか用意してたのにい…”

最後に、きひひつ、と笑うと〈アサギ〉の姿は消えてしまった。

「お、わった……？」

刀の刃をゆっくりと地に降ろしていく。周囲のフィールドが、ぼろぼろ、と音をたてて崩れていぐ。

「急いでここを出るぞ！！」

「ああ……！」

ナツメの後を、一人が走る。ケルベロス冥界門番に、ユサギと集が乗り、続けてナツメが乗ろうとした時。

“…………君、に…贈り物…を…”

ナツメの足に膨大な数の鎖が巻き付く。鎖に引っ張られるまま、ナツメは滑り落ち、そして床に空いていた黒い水に飲み込まれた。

「ナツメっ！－！」

集が飛び降りようとした時。ぐん、とユサギに腕を引っ張られ、尚且つ冥界門番ケルベロスの走りに邪魔されて出来なかつた。

「ユサギっ！－！」

「…………ごめんなさい。」

ぽつり、と呟くユサギの表情は読み取れなかつた。

「ごぼ、と音をたてて肺に黒い水が入り込む。それでも何故か意識は薄れず、息が出来ないという事はない。

目を開けてみると、黒い水に埋もれずに輝く何かがあった。

それを一つ、手に取る。それは、あの宝石。

夢の中で幾度となく壊した箸の。

“それ……。あげる。君のモノ……きひひ”

その中にはやつぱり、あの笑顔。愛されて、幸せに満ちる笑顔。それが堪らなく嫌で、壊そうと力を込める。

“壊させないよ。だつて、君のモノ……は僕達はのモノだから、壊しちゃ駄目なんだよ……きひひ”

壊れない宝石は、私の中に溶けていく。

拒絶は許さない。そう、誰かが言つた。

それでも、拒絕したいと誰かが言った。

心に染みる宝石に耐え切れず、私は目を閉じた。

完全に崩れた城を、集は只見る。そして、ナツメが出てくるのをずっと待っている。ユサギは口を固く閉ざしたままで。

「……あ。」

ユサギが漏らした声と、視線に注目すると

「…ナ、ツメ…！」

誰かに姫抱きされているナツメが、崩れた城の前の川を渡っていた。

「…！」

ユサギが鎌を構える。ナツメを抱えていたのは、漆黒の髪の「アサギ」だった。〈アサギ〉はナツメを柔らかい草原の上に寝かせる。

「どういう魂胆ですか…。」

“何も、考えてないわ…。只、とても苦しそうで…悲しそうだったから。心配、しないで”

「お前…〈アイツ〉か？」

〈アサギ〉は集に向かつて微笑む。

「コイツは、俺を助けてくれたんだ。だから、攻撃される心配も無

い」

「そ、うですか。」

今だ警戒を露にしながら、ユサギは鎌を降ろす。

“それより…。ここはもう保てない…早く、ログ、アウト…。”

〈アサギ〉の声に雜音が目立ち始める。

“この子、も…一緒に…。大丈夫、帰れる…から。”

「強制ログアウトの選択。一斉にログアウトの実行を。」

ユサギがそう言うと、体が少しずつ粒子化していく。周りの背景も崩れ、〈アサギ〉一人だけが暗闇に取り残される。そんな風に集は感じた。だから

「お前も来ないのか？」

“私も？どうして？私はここに住人よ？ここにいる義務がある。”

「アサギ」は困ったような微笑みで、集の手をそっと包み込んだ。

その手は恐ろしく冷たかったが、集は振り払わなかつた。

集の体は殆どが粒子となり、残つてゐるのは、手と顔位。

“…もつと話したかつたな。…ほら、早く還りなさい。”

「お前つは……！」

“…”めん。さようなら。”

集達の体が現実世界^{アツチ}に行つた後、
「アサギ」は崩壊したゲームのフ
ィールド内を只管^{ヒタスラ}歩いていた。フィールド内には、アサギのように
ネットワーク接続によつてゲームの世界に来、そして何も知らない
まま崩壊に巻き込まれていく人間^{プレイヤー}が沢山いた。

“早く、ここから出なさい。…出口は、あつちにあるから…頑張つ
て、走つて。何があつても、絶対に振り向かないでね。”

意識が飲み込まれそうになつてゐる人間を何とかしてたたき起こし、
出口だという光の方へと背中を押して促す。

出口の方へ向かっていく人間の後ろには、今度こそ崩壊していく世
界に引きずり込もうと黒い手が何本も這いずりまわつてゐる。それ
に捕まれば、流石の「アサギ」でも救うことは出来ない。

“これ、で…終わり…か、な？”

暫く無かつた雑音^{ノイズ}が再び声に混じる。体にはボロボロと光が零れ、
顔にも時々ブレが生じる。

本体である「あの人」から完全に離れる事は不可能。だが、僅かの
間だけでも本体から離れる事は可能。その代償がとてつもない疲労
と、ざり、と混じる雑音^{ノイズ}。

“も、う…時間、かな。戾らな、きや…”

自分に出来る限りの行動範囲で人間の後押しをすると、人間を取り

込まんと伸びる手の前に立ちはだかつた。

手は確実にくアサギの体を侵食し、痛みとして蝕んでいく。

“ 私……会えて、嬉しかった。 ”

もう、痛みも何も感じない <アサギ> は暗闇の中、崩壊していない
壁にもたれ掛かった。

“ ありがとう。集。 … 貴方に、闇をも照らす光が永久に照らさん事
を … 。 ”

<アサギ> の体は、崩壊する闇に飲み込まれた。

対処20・ゲームの崩壊。（後書き）

：第一章、終われて良かったです。
まあ、まだ続くんですね（・_・^）

対処21・チートはチートのままでした！？

ゲームの世界から何がなんだか分からないうちに、自分の部屋に戻ってきた。……久しぶりだなあ。俺視点。

帰ってきて、やつとゆつくりとした生活に戻れると思っていたのに……。

「集さん。ここひでどうやつて進むんえすか？」

帰ってきて最初の『』飯を作っている最中、ユサギがコントローラーの音を鳴らしながら聞いてくる。ユサギが今しているのは、ゲーラタの中でも難しいと云われているシューーティングゲームの攻略を。（なんでまだ居るんだよ……はあ。）

「ん~？今、何処まで進んだんだ？」

「えつとお……」

ユサギに攻略を教える為に、一度コンロの火を止めて戻る。その向かう途中、どうしてもベッドが目に入ってしまう。ベッドにはゲームで意識を失ったままのナツメが横たわって眠っている。帰ってきて既に5・6時間は経っているが特に異変は見た限りでは何も分からぬ。

「なあ、ユサギ。」

「あい？」

「ナツメに、何があつたんだ？」

「んう~。私にも詳しい事は知らないし、分からぬです。でも、何処にも外傷は見当たらないから……でも」

ユサギはコントローラーを置くと、ナツメの眠るベッドに座った。こうして見比べてみると、ナツメとユサギで目に見える違いが一つ。「ユサギの方が血色が良く見えるけど、それは何か影響してるとか無いのか？」

「え……？私の方が、血色が良い…ですか？」

「うん。」

「サギがナツメの頬に触れると、直ぐにその手が離れてしまった。

「どうした？」

「あ、いえ。……もうすぐで覚めると思っています。」

「サギはそれ以上は喋らず、ゲームに戻った。俺も攻略を教えるとご飯作りを再開するために、台所に戻った。

宝石がじぶんの周りでぐるぐると踊っている。

あんなに嫌だったのに今では何も思わない。宝石の中で煌めいていた笑顔も、もう見えない。

ああ。戻らなくちゃ。私はあの、部屋に。

「さじ、ど。」

軽いご飯…サンドイッチを作り終えると、何とかしてコサギをゲームから引っ張り出す。

「んう。…………つおいしーーー！」

「そりや、良かつた。」

モグモグとご飯を食べながら、ベッドのナツメを見る。

ぴく、と手の指が動いた気がしたからそのまま見ていねど

「…………ん、あ」

ナツメから少しだけ声がしたから、思わず身を乗り出す。

「…………集。」

ナツメの久しぶりの声に集は安堵したが、自分の体勢に後悔した。ベッドに乗り出してナツメの顔を覗き込んでいる。正に

「…………おそおと、したな……。」

起きたばかりでられつが上手く回りではないが、声に怒氣が含まれているから…これは

「…………おんによ…………いつふえん…死んで】おおこーーー！」

あ、やつぱり。

見事なストレートアツパーを喰らって、俺は見事に吹っ飛び、ユサギは

「おおー。」

と、パチパチ拍手をしている始末。

（フオローしてくれよ…）

「だいたいおまえはれえでいいのねがおをほいほいとみるのがすきなのがこの……ドヘんたああい！！」

「いや、違うけど…痛つ。痛いつつーの！！」

ぼすぼす、と枕で殴られる。ナツメの顔が物凄く赤くなつていて、それが余りにも歳相応…いや、もつと幼い感じに見えたから思わず笑つてしまえば。勿論、追加で喰らう訳で。

「それにわたしがねむつているあいだにこはんたべるとかいいこんじょうじやないかああー…。わたしなんてここのこはんなんてほとんどたべてないのだがあ…！」

「えーと、ナツメさん？ ろれつが回つてないし、取り敢えず落ち着こつか？ 痛つ、お、俺のこ飯あげるから…！」

妥協案を辛うじて提示すると、ナツメの枕を持つ手が止まつたから、俺はすかさず取り上げて代わりにこ飯を目の前に出した。

— ……くるくる …… —

ナツメのお腹の虫が早く食べさせると抗議する。涎が垂れてきそうだったので

「…食べていいから。」

僅かに名残惜しいが、俺の部屋を滅茶苦茶にされる訳にはいかないのでご飯……サンドイッチを生贅に…。

俺の扱い、酷くねえ？

ナツメの口に運ばれていくサンドイッチを羨ましそうに見ながら、俺はナツメの飲み物を取りに行つた。

「…落ち着きましたか？」

はあはあ、と息を荒らげているナツメに俺は恐る恐る（まだ怒っている可能性も充分にある訳で）尋ねてみる。

「落ち着いた。だが、ることを許した訳じゃないからな。（まあ、分かつていいけど…。不可抗力だから言い訳ぐらい聞いてくれても…）

「姉様ー。ちょっと、かむひあーです。」

ユサギが、しゅば、と手を上げてナツメを呼ぶ。ユサギは、今までしていたゲームをぶち切り…やめて欲しいんだよなあ、それ。…俺がしていたあの古いゲーム機（勿論、カセットはアレだ。）を繋いで、タイトルを映し出す。そしてコントローラーをナツメに握らせた。何も反応は起きない。

「…やっぱり、ゲームの世界は崩壊しちゃつてますねえ。」

ぱ、とナツメの手を離し、ゲームをやっぱりブチ切り。

「はあ…分かつてたけどさ。集さーん」

「あ、何だ？」

「何か他に無いんですかあ？」

「無い。他のは殆どクリアー済みだし、それは壊れてしまつたし。」

「…まじですか。」

ユサギが部屋を見渡しても、壊れてしまつたゲーム機以外に他のハーデは見つからないしPCなんて以てのほか。

俺はクリアーしたモノは即刻売る主義だからな。

「ううえー…。暇あ…。」

ユサギが、むすつ、と頬を膨らます。それからユサギは何か閃いたのか、俺とナツメの腕を掴んだ。勿論、何をしたいのかなんてのは分からぬ。だが、ナツメはある程度予想は出来ているらしく…分からぬの、俺だけかよ。

「…一応、聞くが。ユサギ、何をするつもりだ？」

「え ゲームが崩壊しても“神力”の力は健在なのか、試してみようかなっててへつ」

「俺は、必要無いだろおー！」

「新鮮なリアクションが見られる数少ない人だからねえ。」
ユサギの、俺の腕を掴む力がまあ強くて。成すすべも無いわけで。
逃げようものなら、二人分のアッパーか何かを喰らう訳で（多分）
「…行かなくてもいいという選択は？」

「無い。」

正に異口同音。二人の俺を見る目がとてつもなく怖いです。

「それじゃ、れつづ」おー

結論：ユサギもナツメも何も変わらない。変わる筈が無いということです。

対処21・チートはチートのままでした！？（後書き）

第二章、開始です（・・・）

今回も、ナツメとコサギを中心に巻き起しの騒動に集が巻き込まれます。ww

今回の第一章は、集の□□も繙に交せられたらと想えでし。予定、ですのでもしかしたら変わるかもしません。ご了承ください。

対処22・Oチートヒロハビリは必要ですか? A:いいえ。必要ななかつたです

「サギにされるがまま、俺はやつぱり^{ワープ}転移に巻き込まれて。強い光に包まれたと思ったら、いつもの、コンビニの駐車場に立つていて。突然の事だから、俺の装備は……軽く羽織った灰色のパークーと、白い線の入った黒の上下のジャージ。年明けなのか、コンビニには正月の飾りがあった。だから、この現時点の装備はかなり寒い。

「……寒いんだけど。」

「流石の私も……少しは寒いかなあ……なんて」
ユサギはわざとらしく体を震わしている。まあ、確かに肩と足が大膽にも露出されている服だから寒いのは寒いだろう。

「さて、ど。ここまで来られる“神力”は残つていると。」

ユサギと同じように肩を出しているナツメは、全く寒さを感じていなっぽい。……流石にこれも“神力”なのかと自然に納得している。慣れって怖え。

「今度は、並木道の先の公園まで行つてみるか。」

「? 何で。」

「姉様は“神力”^{チート}が残つているのかを試したいんですね

「でも、ユサギは何かしたかったからここまで飛んだんじゃないのか?」

「別に ただ部屋にずうつと閉じこもつてないで出たかっただけなので

あので

「あ、そ……。」

遠まわしに俺をちくちく毒舌してゐる気が……。

「それに。気付きません? 姉様、外に出て顔が明るくなっていますよね? まあ、私はそれで満足しましたし?」

「おい。さつさと行くぞ。」

先に進んでいたナツメが振り返つて足を止める。確かに、何處か顔

が明るいよくな……。俺は（後で聞いたが、コサギも）思わず笑つて、ナツメに追いつくために歩みを速くした。

公園は誰も居らず、まあ……年明けだし、皆初詣に行つてゐるのだろう。ここでならあの無駄^{ノンブレタ}」に“神力”を見られる心配も無いか。

「それで、姉様。何をするんですかあ？」

「取り敢えずは……」

ぼ、と小さな光のような……火のような物をナツメは手の平に灯した。その光は次第に大きくなり。

「……桜花繚乱^{オウカマイヒ}」

桜の花弁が一斉に光から飛び散り、雪と相まつて何処か幻想的な風景を醸し出している。桜はほんの少し光を伴つて。

「うわ……。」

「ふむ。これぐらいなら楽勝か。まあ、初歩中の初歩だからな。」

「これも、攻撃の魔法なのか？」

「いや。これは単に観賞用だ。戦つてばかりが勇者^{ヒロイン}の任務では無かつたからな。」

「これで、色々な人達は癒されていたんですね。そして、帰還していつた。」

「帰還？」

「あのゲームでは、ネット^{ノンブレタ}からログインされた人間^{プレイヤー}と最初から存在している役者がいました。人間^{プレイヤー}は長い間、ゲームの中に居ると次第に現実世界の感覚が薄れていく。その消えた現実世界へ戻りたいという感覚を……この桜が思い起こすんです。だから、この花弁は癒やしと齋すと同時に希望でもあつたんですよ。」

コサギの手に桜と雪が相まって落ち、手の暖かさで溶ける。溶けたその一つは混ざり合い、桃色の光の雪になる。

「……さて、ここからが本番だ。」

ぽぽぽ、と連續で光が灯る。光は今度は熱を伴つて、周りに落ちて

染みていく。

「桜花焰山茶花！！」

「うわ……三つの奥義の一気発動……。」

「これがどうかしたのか？」

「普通、奥義は一つずつしか発動出来ないのです。でも“神力”なら最大…幾らなんだろう？かなりの数の奥義を一斉発動出来る筈ですわ？私は“神力”は持っていないのでえ、詳しいことまでは何とも言えないですね。」

「え？ユサギはもつてないのか？」

「はい。私は只のすこおし強い力が有るだけの役者なので」

「ぼおお、と勢い強く燃え盛る炎の近くに居るのに俺は全く熱さを感じなかつた。炎は鞭のように細長くなつて、ナツメの手元に滑る。」

「……ふつ。」

ナツメがそれを軽く振ると、蛇のようにうねつて俺の足元に当たる。

「危なつ（、 、 ）」

「ふ、冗談だ。これに当たつても火傷はしないから安心して当たつてくれても構わない。」

いやいや。火傷以前に怖いつつーの！！

「それが連繫奥義の派生奥義ですか？」

「ああ。名付けるとしたら……桜焰魅蛇」

新しい技の先は、ぱちぱち、と鼠花火のように独立してうねる。…

だから、その先がこっちに飛んできそうで怖いんだつーのぉ…！…

「ふむ。こんなものか…まだ力は残つているらしいな。」

「寧ろ、パワーアップしてないか？…お前のアッパーやら蹴りも威力が上がつてたぽいし。」

「……………そうか。」

ナツメの手に、バチバチ、と音をたてている炎。…さつき、消しましたよね？あれ？

「お前、この威力を試す実験に自ら召乗り出してくれるとわ、なあ？」

「い、いやいやいや。遠慮させていただきますっ！！」

俺はナツメから全速力で逃げる。後ろからナツメが何かしら叫んでいるが、それで止まる訳にはいかない。と、いつもの。

「お前、ぶちのめすっ！！そこで静かに首洗つてろおお……」

「い——や——だ！！」

「……あははっ」

「ユサギも笑つてないで、なんとかしろし……」

ユサギの笑いが消える。直ぐに現れた笑みには悪戯心が惜しげもなく滲み出でいて。…これはやばいパアアターン！？

「では、何とかしましょう」

じやき、と取り出されたのは…あの鎌。

ああ、これ…逃げるオンラインだな

「ちょ、まつ…………！」

「アレ～？どうしたの？」

対処23・日常と異変と恋模様

「アレ～？ どうしたの？ 集。」

暫し流れる沈黙の後。

「……よお、樹沙羅^{キサラ}」

「どういう関係ですか～？」

「どういう関係か、包み隠さず吐いてもらおうか？」

あ、目がヤバイ。二人の武器を持つ手に力が籠もりまくり。
マジで死ぬかも5秒前

「……沢井樹沙羅^{サワイ キサラ}。俺の昔からの幼馴染だ。」

「はい。幼馴染の樹沙羅です。キサって呼んでください」

盛大に殴られた箇所を押さえながら俺は軽く説明する。その後の事は本人達に任せて頭を冷やしに、水場に向かった。

「キサ、さん？ えっとユサギと言います。よろしくお願ひしますね。」

「ナツメだ。よろしくな。」

「はい、ユサギさんにナツメさんですね。はい記憶しました」

「にこにこ」と笑うキサにユサギが尋ねた。

「あの、さつきの……見てました？」

「さっきの？ なんのこと？ ワチは集が何か騒いでいるなーとは見てましたけど、お二人には近づいて初めて認識出来たので。」

(認識出来なかつた…?)

「どういう事、ですか？」

「あ、ユサギさんは何か小さい女の子だなって遠くからは見えたんですよ。でも、ナツメさんはこんなに近くに居ても何かぼやけて見えるんです。」

キサが困ったように笑う。一人はそれ以上は追求せず、話を変えた。

「キサさんつていこからお家までどのくらいの距離があるんですか？」

「歩いて……40分位ですかね。」

「自転車とか使えばいいだろ？」「どうしてだ？」

「……キサ。家は大丈夫なのか？」

帰ってきた集にキサは飼い主に懐く犬のよう、「ここにこ」と笑う。「うん。今は症状も安定しているし、それにいきなり自宅警備員になつたアンタの方が心配だしね。」

「悪かったな」

「別に。只、外に出られるようになったんだから……亜希ちゃんには一度会いに行つた方がいいよ。かなり心配していたから。」

集は頭を搔き、明らか様にめんどくさいというような顔で。

「あつちも俺の事なんて気にしていないだろ？三年も行つてないんだから。担任でもないんだし。」

「そんな事ないよ。溜まつたプリントを届けるかどうか、迷つてたし。」

二人の間で次々に交わされる会話を

「ちょっといいですか？」

コサギが縮こまつて手を挙げて、一回止める。

「亜希ちゃん、って……誰ですか？」

「ああ、俺達の一年の時の担任だつたんだ。」

「一応、コイツも高校生だからねえー」

「へえ……。」

ナツメが何処か上の空な様子で、取り敢えずの領きを返す。

「ナツメさん？大丈夫ですか？」

キサが顔を覗く。

「ああ、平氣だ。すまない。」

「家に戻るか？俺は少し寄る場所があるから、帰りが遅くなるけれど。」

「はい。分かりました…私も一度戻りますね」
ユサギとナツメは公園を後にした。

「何処に行くの？」

「亜希ちゃんに会いに行けって言つたのは、何処の誰だっけか？」
「行くの！？今から！？」

「今は正月だろ？神社とかに行けば、会える筈だろ。」

「じゃあ、私も一緒に行つていい？亜希ちゃんに会つのは久しぶり
だし」

キサは俺の腕に、自分の腕を絡める。俺は顔をゆで蛸にしながら、
離そうと腕を振るが、一向に離れない。

「いいじゃん 今日限りの…正月限定の恋人『こつこ』」

やけに幸せそうなキサの笑顔に、俺は観念してそのまま歩き始めた。

「姉様…？」

「ユサギ、もしかしたら…私は…」

ナツメの表情は髪に隠れて読み取る事は出来ないが、今までに無い
何かしらのショックを受けているようだつた。

「時折、体にブレが生じているんだ。頭に雜音ノイズが響く時がある。
まるで、私が異物であるかのように。」

きゅ、と自分の手を握るナツメ。その手には何も異常は見つからない。今は。もしかしたら、明日、何か起こるのかもしない。

そんな不安の大海に、ナツメは一人、漂つていた。

「きつとここに慣れていないんですよ。まだ、帰ってきて一日も経つていませんから。気長にいきましょう？」

「気長、か。それだけの時間が私に残されているのか…？」

「どういう事ですか？」

「『アイツ』が最高の玩具ユウジヤと称していた私をこのまま野放しにする
とは思えないからな。」

「何かしらのアクションが起こる可能性がある、と？」

「かも、な。」

二人の間に流れる僅かな沈黙。

「……キサさん。実るといいですね。」

ぽつり、とユサギが呟く。

「何の話だ？」

「キサさん、きっと集さんの事が好きなんですよ。」

「?そんな風には見えないが?」

「姉様はおこちやまですね」

ナツメは『恋に鈍感なヒロイン』の称号を手に入れた。
ぴろりろーん。

対処23・日常と異変と恋模様と（後書き）

今回は、少し日常的な事を意識してみました。
それとは反対に少しずつ迫る新たなゲームの予感…的なものもちょっと混ぜてみました

対処24・日常だつていじやないかw

俺とキサは結局、恋人のような感じで亜希ちゃんがいるであります神社に来た。初詣と言つても昼から夕方に動く時間帯なので人は疎らで。

「あ、いたつ。おーい！…亜希ちゃん！…」

艶やかな赤の着物を着たショートカットのあれが……。

「おおー、キサに…集も居るじゃねーか！…久しぶりだな…！」

見た目では大和撫子^{ミスハラ}な女性の鏡っぽいこの人が俺の元・担任の亜希ちゃんこと、水原亜希^{アキ}。

「……黙つていれば、美人なのになあ。」

「何か言つたか？ん？」

気付けば、俺の直ぐ近くまで亜希ちゃんが迫つていて俺は思わず一三歩下がる。

「いゝえ。別に…はい。」

「ふははっ！…相変わらずだな！…良かつた良かつた？」

亜希ちゃんに思い切り肩をばしばしと叩かれる。その中で、その腕が僅かに細くなっているのに気付いた。

「亜希ちゃん。希望ちゃんはどうしてるのー？」

「誰だ？それ？」

「ああ、ウチの娘だよ。今年で一歳になるな。」

俺が世間様に触れていなかつた三年間の間に、時代はしっかりと流れていった。

「それにしても、お前等…リア充か？新年早々、リア充の香りを漂わしやがつて…三才差には見えないな。」

「へ……？…あ…！」

俺は、キサと腕を恋人絡みさせている事をすっかり失念していく…解こうとすればがつちりとホールドされて。

「今日だけの恋人なんですよーえへへ」

「」のままマジ恋人になっちゃえよ

「あ、それは無理だから。そもそも俺が誰かと付き合つと思つか
？」

「「無いな（でしうね）」「

俺は異口同音で言われた言葉に僅かに心を抉られながら、何処か感
じる違和感を無かつた事にした。

「あれ？ もういいのか？」

亜希ちゃんが帰らうとする俺達を引き止める。

「折角だから、ウチのところに寄つていいかないか？」

「あ、いーの？ だつたら遠慮なく」

「おー、お前……」

亜希ちゃんの後ろをキサガ俺の腕を引っ張りながら追いかける。

「折角のお正月だもん 楽しまなきや、損だよ？」

「お前が餓死しないように食べ物も少しほんでもやるわ。心配すんなつて」

ああ、この一人にも逆らえない気がしてきました。

寝転んで見える空みたいに近くつて、でも立つて見る空みたいに遠
い距離。

それでも、一緒にいられる事って幸せだと想つ。
たとえ、ずっと叶わないとしても。

神社から10分程歩いた先に見えた綺麗な家が亜希ちゃんの新居だ
った。

最初は本当にいいのか、迷つたりはしたんだけれども。

「希望、おいで」

「こんち……は。」

「こんにちは」

「俺は礼儀正しい（一歳かつてぐらいの礼儀の良さ）の女の子…希望ちゃん…に挨拶する。

「「めんねー、このオッサンの田つき怖いでしょ？気にしないでねー寧ろ、存在を無視してもらつてもいいからねー」

キサが希望ちゃんを手招きして、自分の腕の中に閉じ込める。

「ふむ、相変わらずのモフモフウ～？あいでっ！…」

「こら。変態発言はやめる」

亜希ちゃんがキサから希望ちゃんを救出すると、キサの頭に特大のにつぶい音。……亜希ちゃん必殺の拳骨…。アレってかなり痛いんだよなー。

「集、これぐらいでいいか？つづーても、餅とか…正月に食べる物ばつかだけど保存出来るヤツ揃えたから大丈夫だろ。」

「ああ、ありがとう。最近、また料理してるからさー食材が足りねえんだよね。」

「料理？お前がか？」

「悪いかよ。」

確かに、今まで料理のくりの字も知らなかつた俺だから驚くのは分からんでもないけどな。

「誰に作つてんだあ？彼女か？」

「えつ！！？」

何故キサが反応した？

「俺一人に決まってるだろ、何言つてんだ…。」

「お前一人だつたら今まで通りで変わらない筈だろお？」

流石俺の元・担任、俺の性格をばっちり掴み済みと。

「で？誰だ？白状しないとウチの裏情報網で調べ尽くすぞ？」

「亜希ちゃんの非公式ファンクラブってマジでそういう事してそうなぐらいのクオリティーだもんね」

「ま、ウチは知つてるんだけどな。」

「俺も昔、何回か勧誘されたし…写真も訪問販売的な事されたなあ

「……何時からあつたんだ？」

「入学式の日に発足してた。その時には既に…新入生の半分は入つてたな。」

「恐るべし、亜希ちゃんパウワー」

キサが机の上にあつた砂糖醤油の絡まつた餅を我がもの顔で食べる。「でも、最近は一人じやないのもいいなつて思うけどな。」

「彼女か…！彼女のーーかああ…！」

「だから、ちげえつての…！」

貰つた食べ物を手に、俺はキサが餅に氣が逸れている間に亜希ちゃんの家を出る。

別に、居心地が悪かつたとかじやなくて…家の一人が物凄く気になつてしまつたりして。

(こんな風になるなんて、一週間前には想像も出来なかつたな)
ふ、と息を空氣に溶かす。その感じが懐かしくて、何度も何度も繰り返した。

「あつれえー？高校生にもなる集さんが、子供じみた事をしていますねえー？」

「…………いつの間に。」

「勝手に置いていくなんてひつどいーー折角のお餅だつたのにいじ。」

キサの泣き言を嫌でも聞いていれば、自分に罪悪感が出てくるのは至極真つ当で。

妥協案として

「俺の部屋で貰つた餅でも食うか？」

普通の少女なら、ここで慌てふためいて帰る筈なのに。

「えーーいいのーー？」

妥協案が、あつさつと現実になりましたとや。

結論・俺の周りは普通じやない。

対処24・日常だつていじやないかw（後書き）

久しぶりの「メーティちゃー」。
ナツメとユサギが出てこなかつたのは、シナリオ上の事であつて…
嫌いとか言つ訳ではないので(*・、*・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849y/>

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年12月27日22時55分発行